

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

# 四百ぶらりん

遠藤たけの昔話集

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

# 四百ぶらりん

遠藤たけの昔話集

編 武 田 正

# 四百ぶらりん

|        |     |          |       |     |           |            |         |       |
|--------|-----|----------|-------|-----|-----------|------------|---------|-------|
| 8      | 7   | 6        | 5     | 4   | 3         |            | 2       | 1     |
| 油取り    | 鱒女房 | 蛙女房      | 泥棒と旦那 | 正月  | 寺子屋ばなし    | — 馬の尻に掛図 — | 南の山の馬鹿聲 | 法印と狐  |
| 19     | 18  | 15       | 14    | 13  | 11        | 8          |         | 5     |
| 16     | 15  | 14       | 13    | 12  |           | 11         | 10      | 9     |
| 天狗の生き針 | 狐女房 | きりぎりすとあり | 猿 聲   | 蛇 聲 | — 花咲かじい — | クイゴコむかし    | 猿と蛙の寄合餅 | かおすと狐 |
| 57     | 55  | 52       | 44    | 41  | 35        |            | 30      | 23    |



## 凡 例

- 一、話者、遠藤たけのさんより昭和四十七年八月にお聞きした。
- 二、話はテープレコーダーに収めたものをそのまま文字化した。
- 三、話の順序は語りの順とした。
- 四、「米沢市関の昔話」の一環として孔版にしたものである。
- 五、翻字は発音に忠実を旨とした。

## 1 法印と狐

むかし、和尚さまがお持斉にお経読みに行つたつてよ。ところが滝沢の向うあたりまで行つたとき、何だべなあと思つたら、狐が道端に昼寝しつたて。と、

「こいつ、魂消らかして呉れつかなあ」

と、法印がホラ貝を持<sup>たが</sup>つて行つたもんで、狐さそつと行つて、こう耳さ当てて、ボホン、ボホンと吹いだつてよ。

ところが、狐は驚いて逃げだつて。逃げつどき後ろ振りかえして、法印さまの顔つくづく見て行つたつて。ほして滝沢さ行つて、みんなの家、お経読んでお勤め終<sup>おや</sup>して帰つてきたつて。

ほして、ちようどその狐いたずらした所まできたらば、色香わるくなつて、暗くなりそうになつた。

「こんなはずはなかつたなあ、まずなんぼそちこち二軒三軒お勤めしたたても、こんなはずなかつたなあ」

と思ったげんども、とにかくそう思っているうちに一寸先見えねえ、真暗になつてしまった。

「困ったごんだなあ」

て思つたてよ。ほしたら向うの方から、

ドンドコ ドンドン ドンドコ ドンドン

なて、太鼓の音したつて。そうすつどそいつき合せて、カンカン、カンカンで茶毘だみの鐘の音聞えるつて。ほして、

「困つたなあ、なんだてこがえなどころで、誰、茶毘など、こがえな滝沢原あたりで出るもんだべなあ」

て思つていだつて。そしたらだんだんと近くなつて、こんどは冥鉢みょうはちの音など、ジャラジャラン、ジャラジャランなて鳴らすずも。ほしていたら、法印さまのちようど足元のあたりさ穴掘らつてで、埋めだんだど。その死人よ。そして、「よしよし」なて、香立ててよ、帰って行つたて。

「奇態なごんだ」

て、尻かけて暗くて歩えばんねから、見っだつて。したらそのお墓から青火、ポポポー、ポポポーで出たつて。ほして死人がワラジ履いて、細すねして、白衣着物きて、その塚から出てきたつて。

「さあさあ、さあさあ、困ったごんだ。お経読み商売だつて…」

さびしくなつてきたつて。「困ったなあ」ていだど。そしたら恐つかなくなつて逃げたら追っかけつど。その死人が追っかけるもんで、何とも仕様ないつたば、ちようど脇に木が一本あつたつてよ。その木さ登つたつてよ。ほしたら、「山伏山伏」て追っかけるずも。そしてこんど木さ登つたら、どこまでも細い音立ててやせた足して、ピタリピタリと登つてきたど。とつても恐つかなくていらんねくて、シンポエまで登つて行つたど。どこまでも登つて行つたど。登つどこないもんだから、その死人が冷たい手して、足おさえだんだど。ピターツと足押えだんだど。「山伏山伏」て。ほしてはあ、こんどあ驚いてはあ、木から逆ささかトンボに降りて来たつてよ。そしたら、ちようど三時頃で明るくて、何にもなかったから、狐の返報がえして言うもんだど。

んだから畜生でも人間でも、やたらにいたずらはさんねもんだけど。どろびん。

## 2 南の山の馬鹿聲 — 馬の尻に掛図 —

南の山ざあ、馬鹿ばかりで、そんな時、平人ひらびとから嫁もらったら、唐傘からかささして雨降りきたら、

「あがなもののさすような嫁もらって、なじよにすんべ」

て言うたってよ。そしたら、戸の口まで来たら、すぼめだつてよ。

「いやいや、魂消て、魂消て、とっても魂消た」  
てよ。

ほれから今度あ、嫁の家さ招ばつだつて。その南の山の兄あんちやよ。そしたら嫁に教えらつじやど。

「おらえの家で普請したから、座敷こしやったから、んだから、『立派だ』ごどなあ、

ええぐ拵こしやつて出来たごど』て、こう言うて誉めろよ」

て、嫁に教えらっじやど。その息子がよ。そしたら、「はい」て行つたど。ほしたら誉めたずも。何か大事な床のどころさ、ちよこつと傷あつたど。んだもんで、

「あそこさ掛図かけてやつどええ」

て、嫁に教えらっじやもんだから、

「立派にできたなあ、ええあんばいにできたな」

て言うて、

「ここさ、こういうシミあるもんで、こいつぱり気の毒しつたのよ。直してもらわんなね」

て言うたつて。したら、ほの娘呉っじや家で、とても感心したつて。

「南の山、みな馬鹿だなて言うげんども、いよいよ娘呉つてみつど、何にも馬鹿などこないから、おらだ掛図どこ考えねで直してもらわんなねと思つてだ」

こんど、

「馬も買ったから見て呉ろ」

て、見てもらったって。したら耳など撫でたり、生きものの好きなもんだから、引っ立てたりして見ただけずも。尻尾など見ただけど。そして最後に尻ひったぐって見だら、尻に穴あるんだ。そうしたら、

「ああ、こりや、ほんにええ馬で、言うことないと思っただげんども、ここに傷あるもなあ」

て言うた。ほして、

「ここさも掛図かけたらええべ」

それが馬の尻さ掛図ざあ言うもんだ。それでばれてしまった。やっぱり馬鹿だど。

### 3 寺子屋ばなし

小つちやい部落で、和尚さま、寺子屋しったつて。そしたら二人ばりさ教えて  
いだつたてな。したら随分とその子どもらが憶え、ええて。こがえな子どもら憶  
え、ええて。

「こがえな子どもら、憶え、ええから、親たちはなんぼかええべから、一つ招ばつ  
てお茶でも進ぜんべ」

と思つて、そしてお正月招ばつたつて。ほしたら立派とてにしてる父さだつたど。  
両方ともよ。ほして、

「立派にばりしつたて仕様ないから、何か歌の一つも詠んでおくやい」

なて言うたど。歌なて何にも知しやねから、詠みようないんだもなあ。そした  
ら、「何でもええから、何でもええから」て言わつたつて。したら一人の親父おやんつま  
ま、裏板も上げない簾上げつた天井見つたら。その寺で、古いのと新しいのとな

げっだど。

「白い菰もある、黒い菰もある」

て言うたつてよ。ほしたら、

「いやいや、大変によくできた、本当だ、おら家えに白いなと黒いなある」

て、和尚さまに誉めらつた。一人の家の息子の親父つあま、また、

「何とも仕様ないんだから、小便でもたれて来たらええんだか、何だか」

と思つて、便所さ行つた。そしてはあ、堅いもんだから、歌一つ詠まねで行かんねと思つてしまつたもんだど。考えただけずあ、「ううん」なしわふきて咳などしたど。

息子はそいつ見て困つたど。そしたら、

「頭うふらふら、しずくたんたん」

て言うた。ほしたら息子は、こんど、

「ほんじゃ、おらだも一つ和歌詠むか」

なて言うたんだど。そしたら先の息子なあ、

前の松 さぎとからすが巢をかけて

白い子もある 黒い子もある

て、こう言うたてよ。それから後の息子は、

水鳥は波にゆられて立つときは

頭。ふら。ふら しずくたんたん

て言うたって。

## 4 正 月

お正月は寒いじだ。そんな時ほいと乞食来たど。ほしたら立派な旦那さま戸の口さ行つて、銭呉れつかと思つて行つてみたら、浴衣着て寒むそうにしたら。したら、その家の旦那さま、

「夏冬は一度に來たか道心坊、かわいそうじゃ、かわいそうじゃ」  
て言うたど。ほしたらその旦那が片目だったてよ。乞食は見ただけずあ、

「夜昼は一度に來たか旦那さま、起きた目もある、寝てた目もある」  
て言わつたど、道心坊に。

## 5 泥棒と旦那

あんまりにも泥棒が流行<sup>はや</sup>つから、おら家でも倉など破られつど悪れから、寝て  
てみつかない、なて旦那、倉さ寝つだじだなあ。ほしたら、キリキリてやつぱり  
高窓のところで、何か道具でやつたべな、泥棒が。

「盗人は外から壁をきりぎりす、亭主はここにきつと松虫」  
て言うど、その泥棒が、

「すでに首は根切り虫、御縁があればまたもおろぎ」  
て逃げて行つたど。

## 6 蛙 女 房

むかしあるとき、暮みtain大洞蛙<sup>びつき</sup>とつて、子どもら、うんと石で殴<sup>なぐ</sup>つてせめていだつてよ。

ある親父つあま、そこ通りかかつて可哀そうなごんだなあと思つて、そしてその墓蛙、お金やつて買ったつて。ほうしてこんど大きな川さもつて行つて放したど。

「決して、こんどこつちの道傍さ出てくんなよ、道傍さ出てくつど、そういうふうになれつから」

て教えて放してやつたど。したらその蛙、また後振り返して、こうして見つけた、行つたど。ほしてよつぽど経<sup>もよ</sup>つたら、

「道に間違つて、こういうどこさ来てはあ、宿もないから泊めて呉ろ」

て、娘が来たつて。そしてその親父つあまどこさ来て、

「毎日泊めておいておくやい」

なて、かまわずいて、

「流しさせておくやい。洗濯させておくやい」

なて、かまわず居んなだど。ほして大した飯食ね。まんま

「おれ、飯なてあんまり食ねったてええから、お湯でも飲んで…」  
なて言う。

「なんで飯食ねば、やせてしまうべちやえ」

「ええなだ。おれなどそんなに食わねったてええなだから」  
なて、その親父つま、奇態で仕様ないから…。

「おれ、今日よ、御法事で行ってくつから、あの、やっておくやい」  
なて言うもんだから、

「行ってこい、行ってこい」

て言うては見たものの、後つけてみだつて。その親父つまよ。ほしたら少し山のとこさ行って、「入って行く気だな」と思っていたら、水溜りの大きな、そこさジャポンと入って行ったつてよ。ほうしたもんで、

「あらら、なんだて、おらえの姉さま、あがな水溜りさ入って行つた」

と思つたら、よつぽどおもつたら、ガジゴジ、ガジゴジなて、蛙うんと鳴いたど。

「うん、蛙か、ほんじゃ」

なて、大きな石持つて、音のすつどきポーんと投げだど。ほしたら音しなくなつた。ほしたら夕方なつたら、「ただいま」て帰つてきた。

「何だまず、遅いこと」

なて言うたら、

「んだず、御法事の最中に誰かにいたずらさつて、まず、和尚さまの頭が割れてお経の最中に石投げらつて、何だかんだて騒いで遅くなつたごんだ」

て来たつて。ほしたらその親父つあま、

「何だ、われ、そんなこと言うごんでは、蛙だな」

て言うたど。したら「何で」て言うたら、「おれだ、その石投げだな」て言うたば、顔色変えではあ、流しの尻さチャポンと入つて行くどき、

「おれ、助けらっじやなのお礼返しに、お前一人でいるようだから、御飯出したり、洗濯したりと思つて来たんだ、おれ蛙だごんだ、さよなら」  
て、流しの尻の水さ、ジャポンと入つて行つたつてよ。んだから、恩返しした  
なだ。んだから何でも助けておけばな…。どろびん。

## 7 鱒 女 房

鱒をとつた子どもらが鱒いたずらしてだから、おどつつあんが金出して、鱒ば  
川さ放してやつたんだど。

ほうしたら、ある夕方、女が来て、

「おれんどこ泊めておくやい、宿なくて困つてる」

て言うもんで泊めたら、それが居ついて、或るとき、あんまりお汗<sup>つげ</sup>拵え上手だ  
から、のぞこんで見にくれんべと思つて、のぞこんだつて。ほうしたら播鉢さお

尻入つて、ガホガホ、ガホガホで、かましつたつて。

ほうすつど、今度は御飯食わねつて、そのおどつつあま。

「何で食わねなよ」

て言うたら、

「おれ、あんまりお汁うまいと思つて、のぞこんで見たら、播鉢さ尻入れたから」  
て。助けらつじやがら、恩返しでもあつたべげんど、鱒さあ、尾すつて、尻  
尾など無くして、卵、砂さすりかたしてるもんだどら、秋よ。そいつのどこ語つ  
ていうんであんまいか。どろびん。

## 8 油 取 り

ただ居て、うまいもの食いだいて、神さまさ願かけしたつて。ほうしたら、あ  
る時、箆持<sup>たが</sup>つて迎えに来たつて、

「何にも仕事しないで、うまいもの食れっどこさ連れて行んから、歩えべ<sup>あ</sup>」

て、箆で迎えに来てくれたって。「ええあんばいだ」と思つて、箆さ、箆なて生まつで初めてだからって、喜んでのつて行つたて。ほしたら大きな山奥の寺みたいな大きな家さ連れて行がっで、何にも仕事などさせないで、板の間拭けつても言わないで、いや、うまいものどっさり食せらっじやど。

「いや、今日はこいつええべ、明日は果物か、今日は魚か」

家などで見たこともないもの、どっさりずつ食せられる。大喜んでいたら、夜オシッコだと思つて目覚ましたら、大きな家だったほでに、どこかで人のうなり声が聞える。妙だなと思つたもんで、そおつとその声のする方さ行つてみだつて。

そしたらば、一番と奥まったどこの座敷から声したんだど。窓を少し穴あけて見たど。そしたらば、「苦しい、苦しい、こがなひどい目あつてるより、ひとおものに殺して呉ろ、ひとおものに殺して呉ろ」て、とても泣くんだど。その人よ。ほしたら、よくよく、よつく見たら、下さ炭の一俵もおこしてな、天井の梁さ男吊るさつで、下から大きな団扇であおり立てて、そうすつど油タチンタチンと出ん

な、下き置いて、そこさ油滴るたようにしっただけだ。ほんで、

「いや、恐つかないこと、恐つかないこと」

て見ったら、二人の人居でて、油とりだったけど。ほして、

「あの、先度せんどの来た男あ、何日くらいおもったら取ったらええんだかな」  
て言うたつて。

「んだな、あんで、よっぽどうまいもの食せたから、油かかったべから、いま三日か二日ぐらいで、あの人の番だごで」

なて言うてだ。ほうしたらふるえたんだつてはあ、恐つかなくて。

「おれもああいう風にされつべなあ」

なて、そおつと来て、寝ていんべと思つたげんど、どこにも逃げつどこないつて、みな錠かかつて、「さあさあ困ったなあ」と思つて、そこら探したら、便所の窓でもあつたか、どっからか逃げたど。そしたら松明たいまつつけて後ろから追っかけて来つずもの。ほしたら恐つかねくて、恐つかねくて、助けて呉くろなんては言わんねんだし、逃げだど。どこまでも追っかけてくる。追っかけ上手の逃げのろいて

言うんだか、足丸まって恐つかなくて歩えばんねうちに追つかける人、速くて速くて、追つつかれそうになつたつて。したら困つたなあと思つてたら、こんどは逃げらんねような川出きたつて。見れば見るほど深いようだ、その川がよ。んで、何とも仕様ないなあと思つていたら、そこに一本橋がかかつていだつて。そいつ死んだら一つだて渡つたつてよ。そしたらその橋から落ちてしまったごんだど。後ろから追つけて来るもんで気もんで、「うあー」ザブンとその川さ入つたて。ところが、それが夢でよ、川さ入つたとたんを目覚めて見たらば、夢だつたて。それから今度、その息子が、ただ居てうまいもの食いたいていうことはやめて、うんと稼ぐようになって、油とりされつから、ただいてうまいもの食うのは油とりばかりだからつて、自分から言つて、それを神さまに夢見せらつじや。夢枕に立つたんだど。それからすぐ稼ぐようになって、その家、とっても金持ちになつたという話だつて。どろびん。

## 9 かおすと狐

むかしよ、かおすときつねがいったど。ところが、かおすて、川の中にいてありつたけのろい奴。それから狐はかさこそしてる。んだもんで山の神さまさ、かおす、もくかく、もくかくと川から上がって来て、出かけたわけだど。二十四日あたりか、正月あたりだったか、寒い時だったど。ほして餅別当に行ったわけだ。みな神さまさ上げるんだから、ほうしたらこつちから狐、ポンポン、ポンポンと走って来て、出つくわしたど。したら、かおすが、

「狐どの、どこさ行きやる」

て言うたつて。ほしたら、

「おれあ、餅を別当に行くどこだ」

て、こう言うたど。

「ほうか、おれも餅を別当に来たのよ、腹減って仕様ないからと思つてきた。狐どの、お前足速いから、おれどこめんどう見て、仲よくして分けて食ねか」

て、こう言うたつて。

「あんまりええな、ほんじゃ分けんべ」

て言うた。鳥居のどこまで仲よくして行つた。鳥居のどこまで行つたら餅見えるもんで、狐走り出したつて、ペカパカ、ペカパカ、じよがらつぽい面づらして、まだかおす行き届かないうち、半分も食べてしまつたつて。かおす行つてはあ、のそらくそらと台さ上がっているうちに、狐、ほとんど食べてしまつたつて。かおす、決めことしたんだど。

「狐どの、うまいがつたべ」

「腹くつちい」

て言うたど。

「おら、腹ぺこぺだ」

て言うずも。

「んだから、せつせと来つどええごで」

なて言わつじやきりだつたど。ほうすつどかおす賢いもんで考えたど。

「狐どの」「何だ、腹くちちくて喋らんねぐらいだ」

て、いっじもと。

「あさつて、おら家さ招ばつて来い、おれ、カジカ汁して食せ<sup>か</sup>つから」  
て、こう言うたど。

「あさつてが」「んだ、あさつてよ、晩方来い」

「ほうか、ほんじゃ、しょうしなごんだな（ありがたいことだな）」

ほうして、あさつてになれば、ええくて、狐、まず、

「早く暗くなればええなあ、今夜寝つど、いま一つ寝つど……」

て、楽しみにして待つて、朝に早々に行つたずも。髪など結つて洒落て、「おはよう」なて、朝から出かけたずも。

「何だ、こんなに早く来たなが」

「んだて、あさつてだべ、今、あさつてだもの」

て、夜明けつど行つたんだど。したら、

「ほんじゃら、まず、お前来ておぐやつたごんでは、あの、おれあお膳部すつか

ら」

なて、流しき行つて、ガタドン、ガタドンなて、カジカ鍋を入れて、火焚いっだどこさ掛けて行つたじも。

「おれあ、味噌もつて来て、入れんなねから」

なて、そう言うてるうちに、鍋の蓋とつてはあ、狐食いはじめっこんだずもやはあ。「あつ」なて、黙つて食べたええがんべ、「あつ」なて…。

こんど骨なのひっかけて、むかし蓆なの敷いっだもんだから、ガリガリなて、切ながつて蓆なのかつつあぎ、かつつあぎ、盗んで食つてだんだずも。

「狐どの、みなお前に食わせんのだから、ほんないやしいことすねんだ」

「何もしていねなだ」

なて。今度は食うにも食うにも、三杯も食つたんだずもはあ。ほうしてまた腹ポンポンになつてはあ、

「腹パンコパンコになつたはあ、破けるくらいだはあ、なじよして獲つたもんだ、ところだ…」

「おらも、狐どのんどこさ招ばつて行きたいなあ、一回」

なて言うど。したら、

「おれ招ぶ、ほんでは、なじよして獲ったんだ、このカジカ」

「よう、なりだけ寒い晩によ、川の水、たんとないどこさ、こう尻かけて居つどええ。と、尻尾さカジカ、どつさりつくもんだ」

なていたど。

「お身の尻尾など太ふつといくて、長いから、なんぼ掛かんだか、夜明けるまで尻尾させ、深いどこでは分んねから、浅いこいどこだどカジカ上がつて眠ぶつていっから、そこさ行つて尻ぶつつけておくどはあ、重たくて、ちよえつと持たつて来らんねくらい掛つこで」

て教えたど。喜んで、

「ほんじゃ、いつ招んだらええがんべ」

「寒じる晩げでないと分んないから、いつでもおれは招ばつて行んから、カジカとつてからお使いしてける」

て言うた。「はい」なてはあ、こんどあ行つた。そうしたら、ある寒じる晩に、こんどは狐尻尾漬けだずも。ちようど前川の浅いどこさ漬けだずも。ほしたら二時頃、尻尾引っぱつてみたど。あんまり寒いから、ミリミリて言うもなあ。

「よつぽど掛つたな。ミリミリて言うなあ」

なて狐寒くてぶるぶるて言うどこ、かおすどこ招ばんなねから我慢してる。我慢し切れなくなつたげんども、

「こんど夜明けてきたから、行くべはあ」

と思つたつて。ほうしたら引つ立ててみたら、ミリミリて言わなくなつたつて。よつく凍<sup>し</sup>みついではあ、そうして引つ張つたげんども、いっこう尻動かねぐなつたてよ。凍<sup>し</sup>みついではあ。そうしたもんで、そこ畜生なもんで、黙つて引つ張つてみれば、ええことに、なんぼ引つ張つても尻尾出て来<sup>こ</sup>ねもんだから、ギヤーギヤーなて引つ張つたずも。ほうしたれば道踏みカンジキ持<sup>た</sup>つて出て、

「なんだ、おい、お身、狐鳴く音だ、んねが」

「うん、そう言われれば、ほだようだな」

なて言うたど。

「何だ、そこらで鳴く、んねが」

て言うたずも。そして、こうして見たずも。したら狐は一生懸命でふんばり方  
したずも、尻尾とりで。ほうしたら砂掃きで、箆へらの大きな持つて行つて、ワサ  
リワサリと根まで行つたげんども逃げらんね、尻尾凍みついて、ほんでこんど箆  
で叩がつて狐とらつてしまつたけど。と、かおす喜んでよ。ほだから嘘語つたり  
意地の悪いことしたり、餅をみな一人で食べて悪れことしたり、人が招べば鍋の  
蓋なのとつて、みな食つてしまつて、いたからで、嘘は決して言うたりするもん  
でないもんだけど。どろびん。

## 10 猿と蛙の寄合餅

猿と蛙が、あるときお盆になったもんで、「おら達も餅食べたいもんだなあ」て言うたど。そしたら蛙びつきがよ、

「おれなんて、のろくて、とつても餅なて食んねから」

たば、猿、

「ええ、ええ、おれ皆細工すつから…」

「どうしたら、ええがんべ」

て言うたら、猿智恵さつそく出したつて。

「夏だから、暑あつたかいから、表で餅搗うぐに相違ちがないから、お盆だから、んだからお前まへが川さ入いつて、池たんなけさ入いつて、赤ん坊の泣き声しろ」

て、猿に教えらつじや。ほうすつど今度は餅搗うき始はまった頃、隣で餅搗ういた。

「よつぽど搗うけたな。いまちいと搗うかんねなあ」

「いまちいとで搗けるなあ」

なて言うたど。ほうしたら蛙、こんどきだと思つて、ジャポンと入つて、コッ  
コ、コッコー、コッコ、コッコーて、言うたずも。

「あら、何だまず、おぼこ池さ入つたんねが」

なて、それっちゅうもんで、臼、杵投げではあ、みんな池の方さ行つたつて、  
猿かぐつで、こんどきだて言うもんで、臼、ゴロゴロとまぐつたつて。ちよう  
ど山の神の天井の山までまぐつたど。こつちで今搗いた餅、臼がらみないなて言  
うたて、まさか猿、山さもつて行つたて知しやねから、近所ばり探<sup>た</sup>ねで、

「隣でもつて行つたであんめえか」

なて、そんな馬鹿なこと語つていだ。したらいいいよ山のところまで行つたら、  
いや蛙の、のろいこと、ちよつこらさつとは来ないつて。いいいよ蛙来たら、

「ほんじゃ食うべな、猿どの、恐かつたべ、ひどかつたべ」

て、気兼ねしたど。自分がまぐらんねもんだから、したら猿、意地悪れこと、  
「駄目だ、この餅、ただで食つて駄目だ、せつかくこうして持つて来たもんだも

の、山の峰さこの臼持つて行つて、山の峰からこの臼ゴロゴロまぐつて、追つかつた人食うごんだ」

て、こ言うたつて。したら「うーん」なて蛙、きびちよした。

「じゃ、おれ、いっこ食んねごで、食んねごで」

「そがなことあんまえちやえ、うんと果報だもの、お前、のろいなて言うたて、臼の隅<sup>すま</sup>こさでもくつついて行けば、お前ばり食れつかも知んねえごで」

なて、猿言うたずも。自分が自信があるもんで、そうすつどやつと真赤になつて、猿、天井まで持つて行かんねくて、よつぽど上まで持つて行つたど。臼を…。

「ええか、蛙どの、まぐんぞ」

んだげんど、蛙、きびちよして声立てね。

「ええようにすつどええごで」

ていたど。

「そら、一、二、三」

なて、まぐつたど。ゴロゴロ、ゴロゴロとまぐつた。ほうしたらあんまりにも

はあ、講釈したもんだから、餅は半分の上もはあ、木の枝さ引つかかって、餅が臼から出てしまつたどはあ。

そうすつど、蛙、

「どうせ、おれなどいつこう、一口も食んねなだから、なるだけ静かに行くべぢや」  
なて、ピタラピタラと山から落ちて来たど。ほうしたら餅いっぱい木の枝さ、  
ひっかかつていだつて。

「いや、よくしたもんだ」

て、舐めて餅食つたど。ほうしたら猿下まで行つて見たば、臼、空からだつてよ。

「あららら、何だ、おればかり食くてくれんべと思つていたら、蛙は鳴く真似したくらいで、みな持つて来たな、おれだもの」

と思つてたら、今度あごしやげで、ぶつぶつとふぐつで登つて来た。したら蛙、  
「うまいなあ、猿どの」

て言う。蛙、

「おら、拾つたんだもの」

て言う。「おれにも食せねが」て言うたど。

「駄目、食<sup>か</sup>んねごで、お前、下で白んな食うどええごで」

「白にないもの」

「ないわけあんまえちやい、お前まぐつて行つたんだもの」

て言うずもの、意地悪くて、今度。

「困つたな。ちいと呉つてみねえか」

下いじつど下見て、食うど口元見て、食<sup>く</sup>だくて、お猿が仕様ないごんだずも。

「んだな、そがえに見てんもの、呉つこで」

て、餅、手さからんだど。そうして猿の一生懸命で見つた面<sup>つら</sup>さ、ビデツと押つつけたど。ほうしつど「熱い、熱い」て、猿は取つかと思うど、蛙も手熱くて取らんねぐなつたど。蛙も火傷して、猿の面も餅ぶつつけらつじやもんで、猿の面赤くなって、ほうして蛙が火傷して、両方の手、水かきみたいにくつついてしまつたて。ほだから猿の面が赤くて、蛙の手に水かきあんなだど。どろびん。

11 クイゴコむかし ― 花咲かじい ―

あるところで、じんつあとばんつあ二人で暮しつたど。ところが白い犬の小さな飼つてだ。ポチと名付けた。「ポチポチ」て、とっても可愛がつていた。

したらある時、秋の天氣のええとき、クエンクエン、クエンクエンなて、じんつあとばんちやと裾くわえて、畠の方さ、ポチなりになつて行つてみだつて。したら、

「ここ掘れ、クエンクエン」

て言うもんだから、ポチなりになつて掘つてみだつて。したら大判小判がいっぱい出たつて。ほうすつど喜んで、こんどはそいつ家さ持つて来た。そしたら隣のばんちや、「火呉くろ」て来たど。

「ああ、持つて行げ、持つて行げ」  
て。

「火の種、なぐなつたどが、持つて行げ」

「あららら、なんぼこっちの家、金持ちになったこと、米など。そがえ大きい袋さ買つて来て、お前だ、ええ掘なしなど着て何よ。まず金持ちになったごと」

「おらえのポチよ、おらだの掘くわえて連れて行くもんで、行ったら、こんど、クエンクエン、クエンクエン、ここ掘れ、クエンクエン、クエンクエン、て足で土、かつつあいで見せるもんだから、掘ったばお金出てきたんだず。そんでよ、そいつの金でお米買つたり着物買つたりして来たんだ」

て言うたらば、

「あらら、けなりごと（うらやましいこと）、けなりごと、おれさ貸さねが」  
て言うたど。

「貸したくないげんども、隣だて金持ちになつじやいべから、ほんじゃ、持つて行け」

て言うたら、隣のいじわるじんつあ来て、首縛ったれば行きかねて、行ぎだくないからて、クエンクエン、クエンて泣くな、首縛つて無理矢理に連つて行つたど。ほして行かねて言うな、自分の畠さ連つて行つて、掘れとも言わねな、掘つ

たつて。そうしたら何だ、それこそ牛の糞はつこなど出てきたり、瀬戸かけなど出てきて、さっぱり分んね。ほうすつどじんつあ怒つてはあ、いじわるじんつあ、くらすけではあ、鍬でぶん殴つて殺してしまつたど。

そうすつどこんど、こつちの正直じいさんとばあさんが、

「ポチ、よこして呉ろ」

て言うど、

「知しやね、ポチなど知しやねから」

「おれ、貸したくないな借りて。貸したんだから、よこして呉ろ、お飯食ませなねから」

て言うたば、

「ほだな、ぶち殺した。あの瀬戸かけなどばり出てきたから」

「あらら、困つたごんだ」

て、はあ、こんどあ、じじとばば泣いではあ、二人で殺しつ放はなして投げておいたもんだから、連れて来て、穴掘つて埋めてなあ、花立てて、立派にして、

「じんつあ、じんつあ、クイゴコ、おらだどこ金持ちにして呉つじやも、松の木  
の一本も植えておけはあ」

て、松の木植えだつて。ほうしたら、その松、おがるもおがるも、五六年たつ  
たら、一丁前の木になった。ほして、

「こいつで、こんどはお金もなくなったしすつから、臼でも搥<sup>ミ</sup>しやつて、米でも  
搗いて食うがはあなあ」

なて、臼搥つた、小さなな。そいつでじんつあ搗いっだ。そしてよつぽど米搗  
いたらザックラザックラと、こんどみなお金になったど。米がお金になったつて。

いや喜んで喜んで、また金持ちになって、お米買ったり、お魚買ったり、お酒買つ  
たりしていたら、隣のばんちや来て、

「なんだ、また金持ちになったな」

「あの、お前どこで殺したポチさ墓じるしに松植えだば、あんまりにもずんずん  
おがるもんで、よつぽど大きくなったから、臼搥つて米搗いだば、米がみなお金  
になったず」

て言うたど。したら、

「ほんじゃ、その白貸して呉ろ」

て、また白借りらっじゃど。

「困ったごんだ、おら貸したくないげんども、貸せてがぁ」

て、貸してやったど。貸さねなて言うたて背負って行つたごで。

ほしたらこんどその、たんともない米入つで搗いたど。また茶碗かけになつてしまつたど。したらごしやえで、斧持まさかりつてきて白ぼっこしてしまつたど。割つかいてしまつたど。こんどは、

「仕様ないなぁ、白いつまで経たつても隣で返してくんねえから、白もらつて来こいはぁ、じんつぁ」

て言うたば、

「白かえしておくやい」

て行つた。

「白な、はつけなもの、わかんない。皆瀬戸かけになつたから、いたましい、い

たましい。何くやさしいかしんねえ、米返済まよつてもらわんなね」

て言わっじやんだど。

「返済まようから、白まばり返して呉ろ」

「白まなの焚もいて、背中あぶりしたはあ」

「なんだ、白焚もいだごどか」

て言うたば、

「あんまり寒いから、白焚もいて背中あぶりしたから、白まなどない」

「ほんじゃ、灰あく、そいつ貰もらつて行くべ」

て、灰もらつて来た。そしてこんどその灰もらつて来て、じんつあ、

チチンポイポイ コガネサラリン

なて撒まいたど。折も折、殿さまの行列、そこ通りかかったど。ほしたらその灰撒まいたな、枯木かきさみな花になつて咲さいだど。桜花おうぎみたいに満開になつて、

「こがえな妙たがなじんつあ、ない」

なて、扇子あふぎなの持つてお殿さま喜んで誉ほめめで、御褒美ごほうびどっさりもらった。また

隣で真似して、

「おれも、竈にちいと残っていたわけだべ、あの灰もって行つて、テンテンと行つて、

「枯木に花を咲かせる、花咲かじじい」

なて行つて、ふつたつて。そうしたらあいにく風吹いて来て、殿さまの目さ灰まなぐ入ってしまった。しばらくだ。んだから人の真似ざあ、決して意地悪と、そういう真似すつど、そういう目にあうから。さんねごんだど。どろびん。

## 12 蛇 髻

毎日、きれいな男が通つてきたど。したら、かあちゃんか、

「何だ、あの男、身元も知しやねもの、毎日こうしてええもんだか」

て言うたつて。そしたらどこさ行つたじもなく、朝になつど居なくなる。した

ら、こつちでも変だと思つてだら、白い糸に針を衣裳の裾さチヨクツと刺してやつた。そうすつど、コロコロ、コロコロと玉ほぐれて行つたわけだ。そうすつどその糸をたよりに行つたら、よつぽど家から離つたどこの原に、穴あつて、穴さ糸が入つてゐる。こゝろやつて聞いてみつど、何となしに、中で話し声する。んだから娘が聞いたでよ。したら、

「んだから、人間さなの決して構うなて言うに、われ、馬鹿で人間さなど行つてつから、そういう風になつたごんだ。蛇は鉄類毒だから、そういうことして針など刺さつては死んでしまわんなねごではあ」

て、そのおつかさの音するてよ。

その娘、穴んどこに耳をつけて聞いたたら、

「ほだてなあ、その代り子どもいっぱい娘の腹さおいて来たから、おれ死んだたて、子どもいっぱいふえつから、ええなだ」

て言うたてよ。そしたら、

「馬鹿なこと語つていねんだ、われ、ほだから馬鹿だごんだ、人間なんて賢いも

んでよ、これからじきに五月になって菖蒲とヨモギをとって、それをお湯さ入つで、菖蒲湯を立てて、入っじど、そんなものの腹さ入ったものなど、すっかり降りて来るもんだから、にさ死ぬべし、子どもはそうして人に殺されんべしすっど、何にもなんね。ただ馬鹿みたいなわれぶりだごで、ほだから人さなど行くなて言うに……」

かあちゃん蛇は、やたらにくやしがっていだっけ。そうすっどこんどはそいつ聞いて、娘テンテンと来て、五月節句になったもんだから、宵節句の晩げからはあ、軒場さ菖蒲とヨモギさして、そして自分が菖蒲とヨモギお湯さ入つで、入ったらばべろつと流産して、その蛇子出たど。んだから菖蒲湯さあ入るもんだど。どろびん。

13 猿 聾

あるところによ、じんつあがかなり大きな百姓しつたけど。娘三人もつてだど。  
そしたら、田の水みな干<sup>ひ</sup>つてしまつたど。じんつあ、家の前さ出て、こわいも  
んだから（つかれたので）、

「ああ、おら家の田の水、みな干<sup>ひ</sup>つてしまつた。こいつ誰か掛けて来てくれる人  
いっじど、三人娘持ったな、どれでも呉<sup>く</sup>れっけんども」

て言うたば、退屈して山に、猿、木さのぼつていだつたど。そうすつどそれ聞  
きつけて、「ええこと聞いた」て言うもんで、だんだんと来たつて。ほしたら、

「何て言うた、じじ、今」

「おれ、田の水干<sup>ひ</sup>つたげんども、こわくて行かんねから、こさ田の水かけて、後  
千刈、前千刈の田さ水かけてくれる人あつたらば、あの娘三人のうち、どれでも  
呉<sup>く</sup>れるて言うた」

て言うたど。そしたら、

「水、おれ掛けて呉れっから」

て言うて、デンデンと走って行つて、ドンドンと掛けて呉つた。

「じさま、娘呉ろ」

じさま、やつこくなつてはあ、

「何て言うたらええがんべなあ」

て思つて、やつこくなつて、一番大きい娘に、

「まず、田の水干つたな、猿にかけてもらったもんだから、誰か猿のところさ嫁に行つて呉んねえか、お前一番大きな人だから、大きい娘だから行つて呉ろ」

「嫌んだ、馬鹿らしい、人間が猿のおかたになつていられっか、行かねぞ」

て、いっぺんではねらつた。困つてじじは、今度は泣き面かいで、二番娘さ、

「われあ行つて呉んねえか」

て、こう言うた。したら、

「姉さま嫌んだどさ、小馬鹿くさい。猿のおかたに行つてらんねな、おれ」

て言わつじや。じんつあ困つてはあ、飯食わねで寝つだつて。したら一番の末子ばっち娘、「おどつつあま、飯食えまんまけ」「食ね」て言うたら、「何んで食ねこんだ」「食だぐないもの」

「何そがえに泣き面つらかいでいつこんだ」

「おれ、猿と約束して、あんまり田の水干ひつてむごさいようだから、稲むごさいようだと思つて、水掛けて呉れる人あつたら、娘呉つてもええて言うたもんだから、猿掛けて来て、猿にせめられつから、誰か嫁に行つて来んねど、おれせめられつから、ほだから、おら泣いっだんだ」

て言うたば、

「よしよし、おれ嫁いんから、じつちやなど泣かせるものあつときは、猿のおかたでも狸のおかたにでも、おれ嫁いつて呉けつから」

て言うたつて。そしたら喜んで、じじ起きて飯三杯も食つたつて。ほしてこんどは居たら、猿、髪など結つて、立派にして貰いに来たじもの。

「あまりええから、おれ行んから」

て、猿に連<sup>つ</sup>で行が<sup>つ</sup>で、山さ行<sup>つ</sup>たば、笹葉で小屋なの掛けていだ<sup>つ</sup>けど。  
ほしたらこんど、「餅搗くか」て言うたど。

「お節句だぜはあ、餅搗くのか」「餅搗<sup>つ</sup>こで」「米あ<sup>つ</sup>か」「ある、餅搗<sup>く</sup>なだ」  
「ほうか、んじゃまず、餅でも食<sup>つ</sup>て、御祝儀しないうちは、おかちゃんにならんねもんだからな」

て教えだど。

「まず立派にして御祝儀してもらわんなね<sup>ご</sup>で」

「ほだ<sup>ご</sup>で、来<sup>て</sup>もら<sup>て</sup>だばりでもええ」

て、猿、馬鹿で言うたじも。

「あまりええ、餅搗<sup>く</sup>べな」

「おら、恐<sup>お</sup>なくて餅<sup>な</sup>の搗<sup>かん</sup>ねから、お前一人で搗<sup>け</sup>」

「あまりええ」

餅搗<sup>い</sup>て、そしてこんど二人でい<sup>っぱ</sup>い食<sup>つ</sup>たど。

「お節句礼に行<sup>かん</sup>なね<sup>ご</sup>で」

「ほだごで、お節句札に行かんねごで、なんぼ御祝儀しないったて、お節句札に行かんねごで」

猿ええ気になって、調子さのつて言うたつて。ほうすつど、

「何餅もつて行ったらええがんべ」

「何餅もつて行ったらええんだかな」

「重箱さ入つて持つて行んかはあ」

「重箱さなの入れつど食ねさ、おらえのおどつつあ、重箱くさいつて言うもんで」

「納豆餅か」「納豆くさいて食ねさ」

「小豆餅か」「小豆くさいて言うも」

「お汁餅か、ほんじゃ」「お汁餅など大嫌いだ、お汁くさいつて食ねぜ」

「めんどうなおどつつあだな、ほんじゃどうしたらええがんべな。んじやいっそのこと、鍋がらみ持つて行んかはあ」

「鍋くさいて言うぜ」

「こら困った、ほに。ほつけめんどうくさいおどつつあか」

「臼がらみだど喜ぶさ」

て言うたど。

「臼がらみ背負わんなねのか」

「んだごで」

背負ったど。

「男だもの、がってにしていらんねごで」

て言うたど。男なもんで猿背負ったど。ほしたらひよこひよこと背負って、ずうつと来たれば、川つぶちに節句なもんだから、桜の花満開に咲いっただずも。

「あららら、あの桜の花とって行ったらなあ、なんぼおらえのおどつつあ、花好きで、なんぼ喜ぶかしんねえなあ」

て言うたら、

「ほんじゃ、取っから。どっこいしよのしよ」

て、休んだずも。

「あららら、土くさいて食ねぜさあ、そさなど休むど」

て言うど、

「何だ、白き入ったぜ」「白き入っていだって、土くさい言うから駄目だ」

「ほんじゃ、背負って登んなねなか」「ほだこで」「あららら…」

猿など困ったげんども、

「お松、そういうごんでは、おれ背負って登っこで」

て、泣き面かいて登ったど。ほうしたら岩くらの川ふち登って、桜の木さ登ったど。

「ここらか、お松」

て、ちいと登って手かけたど。

「駄目だ、美しくないもの」

ぴたりぴたりと登って、

「ここらか」「そこら分<sup>わか</sup>んね、ばらつとしてんもの」

「ほんじゃ、どこええごど」

そのうちにプルプル、プルプルと猿ふるげっじも。恐っかなくて白背負ってだ

もんで、

「いまちいと天井、そこらんどこええべ」

「ここらか」「いまちいと天井」「ここらか」「いまちいと天井」

しんぼえの、なんぼ猿木登り上手だて、ぼきんていうけあ、折おだつでしまつたど。

臼背負ったまんま、ザボンと川さ入ったつて。そしたらこんど、なんぼ猿くやしがつたがよ、

さるさんざんの命おしくない

あとに残りし お松恋しい

て、流つで行つたど。

ほだから、猿は猿で縁組みして、人さまの娘欲しいなて言わねもんだて。どろびん。

14 きりぎりすとあり

きりぎりすて、きれいな着物きて歌うたっているもなあ。そしたら毎日何にも仕事しないで、きりぎりす、涼しいところに歌うたっていると、お盆も過ぎて九月になって十月頃になったらよ、こんど寒くなって着物も枯<sup>か</sup>ちやれで来てな、よくよく寒くなった。んで、

「はてな、困ったな、誰に相談したらええんだか。食べもの一つあるもんでないんだし、何とも寒くて日送らんねぐなったようだ」  
して、

「小鳥さん、小鳥さん」

鳥さえずっていたけがら、木の下き行ってみだつて。

「何だか、夏はええがったげんど、こう寒くなつては何とも仕様ないから、助けて下さい」

て行つた。したら小鳥が、「夏どうしてた」て。

「夏涼しくて、毎日歌うたって暮しった」

て言うたら、

「そんなの、かまわんねごで」

て、飛んで行ってしまった。今度は川端さノサリノサリと行つたば、蛙、びつぎちよこなんとして川つぷちに居た。

「蛙さん、蛙さん、あの、こう寒くなつて、おれ、着物もなくなつたし、みな枯かちやれではあ、損じてしまったし、食べるものもないから、助けて下さい」

て言うたら、

「夏何しった」

なて、ちつとも蛙など言わね。黙つて聞いっただけあ、ジャポンと水さ入つてしまつたど。そして今度聞くとところがなくなつて、そこらさまよつて騒いだら、ありが一生懸命で何が引きずつて働いっだ。

「ありさん、ありさん、おれ寒くてとても死にそうだから、助けて呉ろ」

て言うたら、

「何しったごんだ」

「夏のうち、涼しいうちに歌うたっていたけあ、今となつては歌も出なくなつて困っていたから、助けて呉ろ」

て言うたら、ありさんは、

「おら家の家さ入れ」

て、チョロンと入って行つて、きりぎりすも入れてくれたど。そんで、きりぎりすは中さ入つてみたらば、一生懸命でみんなが稼いでいだつてよ。ほんで今度ぐるつと見たど。

「ここはおらだの倉庫で、夏一生懸命で稼いだもんで、食べものはどっさりあるし、こつちはあるの学校で、ここで生徒が教えらつていつどこだ。お前、学校あつか」

「学校などなかった。おらだ勝手に歌っていたんだ、音楽も何もなく勝手に歌っていたんだ」

「そんじゃ分ないごで。きりぎりすさん、それでは駄目だから、一生懸命で夏

働いて、そうして立派に学校建てて、そうしてこんど、みんなで食べもの、冬うち食べんのをしまっておくようにして、丁度食べるものばかりでなく、冬うちの物心掛けるようにして、そうしなね」

て、ありさんに教えらっじやてよ。そんでそれから、

「なるほど、おれが悪るがった。こんどそんなこと決してしね」

て、心入れ換えて、穴から出てきて、きりぎりすも昔と違って、来年からのきりぎりすは賢くなるようになるごんだべて。んだから、お前だも一生懸命に稼いで、学ばんなねぞ。どろびん。

## 15 狐 女 房

狩に行つて、保名が逃げてきた狐ば、袴の裾さ隠してくれたどな。

そして、狐が恩返しに葛の葉姫、婚約者いいなづけに化けて来て、毎日機織つてくれて、

保名のどこ食べさせっただんだな。そして出来た子どもは童寿丸て言うのだな。

ところがそこさ葛の葉姫が来たもんで、とても居らんねくなつてはあ、乳飲み子置いて信田の森さ行ったんだな。で、あんまり子どもが泣くもんで、乳母さまもいねうちに、保名が信田が森さ行つて呼ばつたつて。したらガサガサ、ガサガサと言うて、笹藪から出てきたな、自分が助けてくれたときの狐だつたて。

「そんな姿で出てきて、お乳も飲まんねがら、元の姫に返ってくれ」

て言わつじやから、化けて出てきて、乳のませだど。人間の交わりしたもんだから、信田が森で、あまたの狐にはぐれ者にさつて、はぎらつて、つまらなく狐が一生過したんだど。そうしてその子どもが日本一の占い師になつたつて。

16 天狗の生き針

とっても聞かず野郎で、親父に折檻さつで縛りつけらったんだど。山の木さ。そうしたら夜中ごろになったら、すごい風が、さびしい風が吹いて来たど。ほして今度、

「何だべなあ」

て思ったら、バタバタ、バタバタ羽ばたきして天狗さまだったど。そして、

「何だ野郎、こがえなところは何しった」

て言うたら、

「おれ、大した悪れごどしねげんど、おどつつあ縛ったもの」

「可哀そうだ、おれ解いてやつから」

「お天狗さま、お天狗さまかぶっていたな、何よ」

て聞いたば、

「これは聴耳の頭巾ていうもんだ」

て教えたど。と、

「この頭巾かぶつじど、鳥が何て言うてだも、鳥が何て鳴いてるも、みんな分かる。鳥が『あしたあの家の人が死ぬ』とか、こうだどかて鳴いてるの、みな分かる」

て言うたど。

「ううん、おれに貸してみねが」

て言うたつて。

「あまりええごで、かぶつてみる」

て、かぶらせて貸したど。それから針も。「こいつあ生き針で、死んだり怪我したりしたどこさ、チュクツと刺すど、死んだ人も生き返るし、怪我した人だど、じきなおるもんだ」

「ほんじゃ、ここんどこさ置ிட்டな、何だ」

「これは羽根だ」

て。ほうして、

「羽根、なじよして飛ぶごんだ」

て言うたば、

「コラコラ、コラコラていうど、ずうっと飛んで行く」て。

「降ちつどきは…」

「オツツェンがツェンて言うじど降ちる」

「んじゃ、その羽根貸してしろ」

て、羽根も針もみな借りて、

「こういう風にか、コラコラ、コラコラ」

て飛んで、

「んだ。そういう風にだ」

て、お天狗さま見っだ。したらコラコラ、コラコラ、

「野郎、降ちてこい、たいがいにして降ちて来い」

「コラコラ、コラコラ」

「たいがいにして、降ちろよ」

なんぼ大きい声出しても、コラコラ、コラコラで行ってしまった。ほうしたら困った。羽根なしになってしまった天狗。そしてずうっと行ったらば、大きな村さ出た。そこのお庄屋の娘死んだなて言うこと聴耳の頭巾から聞こえたど。そこで、「オツツエンがツエン」と降りた。

「この村で誰か死んだ人いたか」

て言うたらば、

「お庄屋さまの一人娘逝くなつて、やんやんでいだどこだ」

て、みんなお悔みして助け<sup>す</sup>つた。すつどその家さ行つて、死んだ人も生かされるなて言うもんだから、たまげてはあ、みんな上座さ直して、

「ほんじゃ娘んどこさ行つて」

なて言うもんだから、奥座敷さ行つたつて。そして何かその針を片腕さ刺してみたど、ほしたらばピクピクで、またこつちの腕さ刺したらピクピク、ピクピクで動いたつて。そして構わず見つたら、「苦しい」なて、生きたど。そうすつど喜ばつて喜ばつてはあ、こんどはその家の簀になつて呉ろて言わつて、簀になった

て言うたな。どろびん。

## 17 団子浄土

じさま庭掃きしたら、団子落っただけど。その団子拾うべと思ったたら転んで行つて、穴さ入つたてよ。

そしてずうつと行つたら、お地藏さま立つてだつて。そしてお地藏さま、めんごい面<sup>つら</sup>して立つてで、

「お地藏さま、ここさ団子転んで来ながったか」  
て言うたば、

「来た。うまそうだから、おれ食つた」  
そうしたば、

「ほんじゃ、おれの膝さ上がってみろ」

て言うので、「ハイ」なて膝さ上がったら、こんど、

「肩さ上がってみろ」

て。そして、

「ほらほら、誰か話し声する、今にここさ鬼共来て、博奕ばくちすつから、その時、よつぽどもよつた時、トテコのコーて言えよ」

なて教えだど。ほうすつどこんど、人の声するもんだから、地藏さまの背中さ隠つて居た。したら鬼共きて、〈丁〉だの〈半〉だのて大たいした博奕したんだど。そしたら、

「トテコのコー」て言うたど。

「一番鶏だ、まだ早い」

「トテコのコー」て、よつぽどもよつてから言うたど。

「二番鶏。三番鶏鳴つど人あ来つから、さあ歩あえべ」

なているうちに、またトテコのコーて言うたもんだから、

「三番鶏だもの、早く歩あえべ」

て言うもんで、こんど錢でも金でもみな投げっ放しにして逃げて行っちゃって、鬼ども。そこさ出てきて、そのお金みな、じさま持つて来たど。

そしたら隣の意地悪じさま、やっぱり隣金持ちになつたことなんて言つて、そして自分も行つたて言うたな。ほして、誰も「上がれ」なて地藏さま言わねなど。まず、地藏さまんどこ撫でだりして、赤えんばい（おべっか）して、そして膝さ上がったり、肩さなどひとつも上がれなて言わねな、上がったど。そしてこんど何か話し声するもんだから、テンテンと背中さ隠つたど。そしたらやっぱり鬼、博奕したど。そんで鶏の真似したど。

そして三番鶏になつたらば、今行くべと思つてやめて、

「三番鶏だから、ほんじゃ歩え<sup>あ</sup>べよ」

なて、行くべと思つたんだげんども、じじあ嬉しくてこたえらんねもんだから、「あの銭みなおれのになる」と思つて、三番鶏のとき、コケコツコー、へへツて笑つたてよ。ほしたらよ、鬼怒つて、

「んじゃ、今んな人間でないか、鶏笑うなて、あつたもんでない」

ほうして地蔵さまのうしろさ廻ってきたってよ。ほうしたらじさま、すくんでいだよ。

「このじさま、にせ鶏だ」

なてはあ、みんなに押えらつて、鬼共にはあ、力まかせに叩がつて、血だら真赤にさつだつて。ほんでこんど、ばば、何ほど貰つて来つかしんねえと思つて、喜んで屋根の上さあがつて見つだど。そしたら血だら真赤になって、オーンオーンなて、おぼこみたいに手放して泣いて来たもんだから、いや、ばば、喜んで、「どれほど重たいんだか、おら家のじさま唄うたつて来た」

泣いっただな知しやねで、大声で唄うたつて来たから、迎えに行かんかねと思つて行つてみたらば、間違いで、血だら真赤になって来たけど。

んだから、人の真似ざあするもんでないけど。どろびん。

## 18 黄粉と爺婆

じさまが庭掃きしたら、豆落つていだけど。半分は種子、半分は黄粉にすんべと思つたど。ほうしたら黄粉こしやつて、すでにじんつあと食<sup>た</sup>べんべと思つていたら、隣の人来たごんだど。「ばんちゃ」て来たから、半分の黄粉だから、それいたましいから、隠せていうもんで、じんつあ尻の下さ押かつたど。

そしてるうちに、屁出たど。プープーッ。そしたら黄粉みな吹つとんで行つて、向うの山の笹<sup>さ</sup>つ葉さくつついだど。

じじ、黄粉探<sup>た</sup>ねに、ずうつと、

「どこまで吹つとんだんだかなあ」

て行つたど。ほうしたらキジは笹<sup>さ</sup>つ葉さくつついだな、ペタペタ、ペタペタて舐めてだもんだから、

「この畜生、他人<sup>ひと</sup>の黄粉舐められんめちやえ、おらだ、ばばといっこう食ねうちに、畜生の分際で食うざあないごで」

て、キジどこぶん殴って取って来たど。そしてこんど、

「ばさま、キジとって来たから、煮て食せろ」なて。

「んだなあ」

なて、喜んでいだんだど。

「おれ、皮むいて切って、こしやって行んから」なて。

「おれ、山さ行って、柴ちいともらって来つから、煮ておけよ、ばば」なて。

「おーい」

て、煮つだ。食つてみたら大変にうまいじも。

「ああ、甘いであんまいな」

て食つたど。

「塩っぱいであんまいな」

また食つて、鍋ごと食ってしまったんだどはあ。無くなつたどこさ、じじ来た

もんで、ただ、じじにおんつあつだごではあ。

んだから、すっかり平らげつど、ことわざに、『ばばのキジ汁みたいだ』なて言

うんだど。

## 19 長い話

その婆さま、とんな「むかし」好きな婆さまでよ、とっても「むかし」好きで高札立てたど。

〈むかし、腹いっぱい聞かせてくれる人おったらば、望み次第の御褒美出すから〉て高札立てたど。したら座頭の人よ、

「かかり子持つてねもんだから、その婆さまに子ども貰<sup>く</sup>つて呉<sup>く</sup>んべ」

と思つて出かけたんだど。ところが「むかし」ちつとも知しやねがつたつて。ほうして、

「高札の表について、参りました」

「よく来てくつじや、さあ早く寄れ」

なて寄せらつで、お茶飲ませらつで、

「まず、早く語つて呉ろ、まず」「はい」

知しやねもんだからよ、

「むかしあつたけど…」

「うん、そうしてどうした」

て聞くなだど、婆。

「あるところに…」「うん、あるところに、何だった」

て、聞くなだど。ほしたら、

「あるところによ…」「うん、あるところ、憶えたぞ。その後、なじよなつた」

うるさい婆でよ。

「蛇、藪からちよろつと面<sup>つらつた</sup>突出したど…」

て言うたずま。

「その蛇、なじよなつた」「その蛇、ちよろつと面<sup>つら</sup>…」

「面、突出したどこ分つた。ほしてなじよになつた」「また面突出した」

「またか」て、聞いてんだど。何になっかと思つて、ほうしたら、

「あんまり面突出していんな、その蛇、何になんべ」

「出だしたど。今度、ノロノロ、ノロノロで出だしたど」

「どこさ行く、ノロノロとか」

「蛇だもの、ノロノロて行くべしたなあ」

「いや、長いなんだ、そがえ大きい蛇か」

「ノロノロ、ノロノロ、今日もノロノロ、ノロノロ、明日もノロノロ」

て語ったど。

「何かないことか」

「いや、これからだごで、何あ出て来つか分かんねごで、今日もノロノロ、明日もノロノロ……」

なんぼ「むかし」好きだったて、半日も一日もノロノロでいたもんだから、ごしやっぱらやいではあ、「たくさんだ」て言うたずも。そればり待つてだんだずも。

「ああ、ええがった、たくさんだか、婆ちや」

「たくさんだ、はつけなもの、今日もノロノロ、明日もノロノロ…、ほだな話ない、たくさんだ」

「ほんじやらば、御褒美に子ども呉くつじえおくやい、おれ、子持たずだから」  
て言うたど。そして、

「呉れんどこでない、見たくもない、はつけなもの、ほに！」

泣くおぼこ、びりびり背負いハケゴさつめて、呉つでやったど。ほうしたら、喜んで座頭、ほくほくて家さ戻つて行つたど。かかり子できたつて。

「ああ、めんごいおぼこだ、女おぼこだな」

「女も男もない連せて行げ」

「何と名付なづいただ」

「おそのと名付なづかった」

婆、ごしやえで、むごさいもんだ。おぼこ泣いで、泣き泣き呉くつじやど。座頭

喜んで背負つて来たど。そしたら、よつぽど来たらば、

「何だ、こら、座頭、どこさ行つて来た」

「おれあ、物好きな婆、どこさ行つて、高札あつたべ…」

「あつたごで」

「あそこさ行つて、むかし語つて」

「何むかし語つた」

「蛇むかし語つた」

「んだべな、にさ（お前）な野郎、何もむかしなど知つたもんでないもの、蛇むかしぐらいなもんだごで」

て言うたら、

「一日、ノロノロて言うたらば、聞き飽きたから、たくさんだて言うもんで、ほんじゃ、たくさんほど聞かせろて言うなだから、ほんじゃ御褒美呉ろつて言うたらば、おそのと名付つたおぼこもらつてきた。おれ、おぼこ居ねなよ、おかたもないし、子どもも居ねし、この年になつて仕様ないから、大事にして育てる」

「おそのどこ、もらつて来たどこか」

「ほだ」

「まず、契約で休みしったから、酒一つ飲め」

て言うたずも。「んだか」なて酒好きなんだから、そこさ尻掛けて飲んだど。ほうしたら、身のほど知らず酒飲んでしまったど。

そうすつど今度あ、野郎べらおその坊どこ、そおつと背負いハケゴから出して、こんどその家さ連<sup>せ</sup>で行ったんだど。

「蛇むかし」ぐらいなで、おぼこ取っ換えてる婆ないごで。座頭だもの、来たとき、おらえさ来ねて言えば、そんでええんだから、こがえな座頭さ貰わせていらんねんだから」

て、代りに豆腐殻、背負いハケゴさ、でつすり入つて呉つたんだど。こんど酔えたもんだから、

「ほんじゃ行くべ、行くべ。待ち遠しがったべ、こんどおれ家さ行つて、うまいもの食せつからな」

て、背負つて行つたじも。そしたら汁垂つたじもな。

「あらら、おその、小便たつたな。んだごでな、おれ、いっこうたださねで、小

便出つかて聞かぬもな。困った困った。かんしょ（堪忍）しろな」

なて、家さ背負って行つたど。ほして、ドッコイショって、「おその、おその」て背負いハケゴさ手入つで触つてみた。冷たいぐなつて、デロデロてなつていたずも。ほうすつど、うんと座頭が泣いだど。

「おその、かすになつた」

て、泣いだど。んだから決してそんげな、つまんねことで他人一人もらうべなて、悪い人だも…。

## 20 短かい話

あるところに、山の神さまさ、男だか女だか、化物だか人間だか知らね者いだど。そういう噂立つたごんだど。そうすつど、ほんじやらば、なじよなごんだべと、行つてみたらええがんべと、村の（鬼平<sup>おにへい</sup>）な若衆出かけたもんだど。そうし

たら、その家に頓智のええ若者いだったど。

「化物なて、人だごで」

て、言うたど。そしたら、

「男だか、女だか」「顔見たら、わがつこで」

昔は亭主持つど、齒染めだもんだ。んだから、

「齒見たら、一番分かっこで、男だか女だか、化物なて、人だごで」  
て言うたど。

「何か疲れて寝っだんだべ」

て言うたんだど。

「みんな化物だなて、あんまり様悪<sup>さま</sup>れ着物きてっからだごで」

「ほだら見たらええごで、ほでなしに寝てるもの」

口開けて見たど。はなしで齒一本もないがったど。どろびん。

## 21 嫁と祭文

姑は姑根性を出して、そうして、

「隣の嫁など、利巧なもんだ、感心すつどこある。あんで昨夜ゆんべななの祭文聞いて、とても泣いただけほに、おら家の嫁なんていうど、祭文など聞き分ける術すべなど一つも知しやねもんだから、分かんねもんだもなあ、隣の嫁は一人前の嫁だ」  
て言うたつて。

「はつけな祭文くらいなこと、誰だて聞かれんべちやえ」  
嫁、口聞いだけど。

「ほんじゃ、よつく聞くどええごで。今晚がおらえの家で語つから」  
て言うたど。

「聞くべ、ほんじゃ」

その嫁、捨て言葉語つていたけ。そしたら祭文語り来て、デレレン、デレレン  
なて言うて、「さるほどに……」て始めたど。祭文よ。ほうしたら嫁は、「オオー、

オオ」て、隣の嫁の上段うわだんになる気で泣いだど。

「なんだまずはお、おら家のおつか、まずそのような大きい音立てて、何だて泣いでいっこんだ」

て。

「泣く術すびも知しやねなて言うもの、泣いっだごで」

て、怒っじもの。

「なんだどて、そんがえに泣くことあんめえちやい。何そんがえに、始まつどこだもの、そんがえに泣くことあんめえちやい、まだ」

て言うたら、

「さるほどに、て、猿火所ほどさ入ったら、なんぼか熱いがんべから、おら、泣いっだんだ」

て言うたど。その馬鹿嫁よ。んだから馬鹿にも一理あるこんだごで。

こんど負けたもんだから、お姑は、

「なあ、隣の嫁など、一晩げにちゃんと頭巾こしやってかぶせたもんだ。ほに。

おら家の嫁なて、子ども産すときはよく産したもんだ。頭巾もこしやつてかぶせられないなだも、習つて来るんだ、隣の嫁に」

て言うたど。

「んだら、よこしてみろ、布地<sup>きじ</sup>」

て言うて、意地たけでも頭巾なて、いっこう恰好にも、形にもなんねがったど。三晩げもいじったげんど、形になんねど。そしたら仕様ないから、嫁稼ぎに行つてるうちに、おつか隣の嫁さ行つて頼んだば、夜ちやんと拵つて、おかちやにあずけてよこした。

「隣の嫁など、われ、三晩げもかかつて縫えねえな、ちやんと縫つてよこした。ほんに隣の嫁はできた嫁だもんだ」

「あたり前、決まっていんべちやえ、ひとが十二時、一時まで、三晩げかかつて、柴八束焚いたんだぞ、そして縫ったんだも、その後縫うのは、何造作ないから」  
て言うたんだど。んだから、馬鹿にも一理あるつて。

## 22 おはつとおさん

おはつと言うなは先の人の子ども。おさんと言うのが自分の子どもでよ、ほしたら、「何とかして、自分の子どもに後とらせたいなあ」なて、そのかあちゃんが思ったわけだ。

そうして、何とかして、こいつ病氣にして殺して呉れんべ、手かけてひねり殺せば分かんべし、するよりも、いつそのこと病氣にさせてくれんべなあて、そうしていろいろ考え抜いたあげくに頭さ、糸取りする杵さ紙貼つて、そさローソクつけて明るくして、頭明るくすれば角見えるわけだ。そして顔かくして面かぶつて、頭さ赤い人參の角出して、拵こしらったんだごで。

そしてコンニャク舌べろ、冷たいなで、夜寝て寝静まった頃、おはつと言う先妻の子どものだこさ来て、顔かくすと布団はいで、べろべろと舐めるなだど。そうすつどおはつが毎日顔青くなつて、そしてはあ、病氣になつて寝てんなだど。と、毎晩来るもんだから、おさんとかあちゃんが寝でつど、毎晩かあちゃんが出て行く

もんだから、後つけてみたんだど。そうすつど別な座敷さ行つて、たいした構えしたじもな。白い着物きて、杵かぶつて、頭さローソクつけて、そうして人參の角で、コンニャク舌で、フワリフワリと出て行くんだど。ほしたら今度、

「何だべな、どこさ行くべなあ」

と、後つけだど。ほしたら姉ちゃんのどこさ行つて、ほしてヒーヒーと泣く声する。ほうすつど毎日考えて、姉ちゃんが死ぬそうになつて御飯も食べなくなつたからで、自分も短刀持<sup>たが</sup>つて、

「姉ちゃん、こつちの座敷さ隠つてろ、おれ、ここさ寝ててみつから」

て、そがな殺すなて知しやねもんだから、おはつて言うな、陰さ寝てろて言わつた通り寝<sup>たが</sup>つだど。そうすつど化けものどこ、突通したんだど。そしてこんど自分で血刀持<sup>たが</sup>つて、代官さ出きたど。ほうしたらその人、もつぱらの噂になつていたど。んだから、情けのある人で、それは、

「おつかで無いごで」

て、教えだんだど。

「いや、実際おれのおつかだ、おれどこめんごくで、そういうことしたなだ」

て言うたら、

「ほんねごで、それは化物ていうものは、夜が明けつど、みな毛が生えて、本物の化物になつてしまうから、早く、これから行つて土掘つて、そして埋めてしまえ」

て教えらつじやんだど。そして役人に教えらつじやはあ、二晩も置くじど、ころつと獣になつから、

「獣になんねごで、おつかだもの」

て言うたげんど、いっこうに人殺したなんていう罪着せねがつたど。かえつて親孝行の御褒美もらつて、姉ちゃんと仲ええくして暮らしたつて。

## 23 笠 地 蔵

二人で暮して、じいさんが山さ行つて、柴を丸つて背負つて来て、そして米沢さ行つて売つてきて、米買つて食べっだど。したらこんどはお正月にもなるからつて、たくさんクゴ帽子作つて町さ背負つて行つたんだど。

ところが、もろもろ、もろと止むこと得ずに雪が降つてきた。ほして道端にお地藏さま立つてやつたど。

見れば見るほど、頭から白子大明神になつて雪に降らつて可哀そうだ。

「おれ、これからお年とりになど、何も食わねで、ただ年とつたたてもええから、んだから大根煮で年取るようにはあ、この地藏さまさかぶせんべ」

と思つて、五つも六つも七つも八つも立つてだ地藏さまさ、そのクゴ帽子全部かぶせた。手ぶらになつた。ほうして、

「はてなあ、こりや米も買わんね。年取りに大根の塩煮で年とりかな  
なて帰つて来た。」

「ばんちゃよ、今来た」

て言うた。

「よく来た、早かったな、じんつあ、なんだまず、その早いこと、早いこと。何買つて来た」

「よつく聞いて呉ろな、何も買つて来ね」

「何したごんだ」

「何もしね、地藏さま、雪こまぶりになつてだから、ぺろつと地藏さまにかぶせ  
たれば、かえつてか足んねがら、これからまつと拵こしらつてかぶせんね。ばば、ば  
ば、んじや年取りに大根さ塩入つて煮て食つて、年取りしつべえはあ」

て言うたど。

「あまりええ、あまりええ。おらだも寒いも、地藏さま寒いも同じことだから、  
ほんじやらばはあ、おらだ大根煮でそいつでお年取りして、酒の代りにお湯呑  
ではあ、そしてお年取りだあ」

て言うたど。

「んだら、あまりええごで」

て、そしてこんど、いま一人の地藏さま残ったから、またかぶせて来るって、またかぶせてきたど、お年取りの日。

ほうしてこんど、大根煮でお湯呑んで寝たど。ほして一寝入り寝て目覚ましてみたら、どこかで何か変な声したって。

「何だべまず、何か変な声したぜ」

て言うたど。

「ほがなことあんまえちやえ、何も変な声などしね」

「いや、変な声したぜ」

て言うたど。ほれからだんだんとその声近くなつて、「エンヤラサー、ドッコイショ」なて言うなだど。

「何だべまず、じさま。ダイモチの音すつぜ」

「ダイモチなて、夜中にダイモチなどひいてる馬鹿もあんまいぞ」  
て言うた。

「ほんだて、ほだぜ、聞いてでしろ」

だんだんと声近くなって、

「いまちいとだぞ、いまちいとだぞ」

なて言う。

ホラ、ヨイトモシヨ エンヤラサノサ

なて、だんだんと近くなってきた。ほうすつど、

じじ小屋どこだ、ばば小屋どこだ

「ああ、ここだ、ここだ」

て言う音する。ほうしたらが、戸も開けねで、窓からドガンとお雷さま落ちたような音したって。そして「何だべな」て、恐っかなくて行っても見らんねくてブルブルふるけて、年取り元日だてば、困っていだ。いよいよ夜明けたもんだから、じんつあ、手ひかえして、一人で行かんねくて、台所さ二人して行ってみたど。ほうしたら、大きな包み落つでだつて。見たら米とお魚とお酒に着物など、どっさり、お金も、みな丸めてカマスさ入っじやり、何かして窓破つて入ってい

だっけど。ほうして、

「いやいや、いやいや、何だべまず」

なて喜んでいだんだど。したらその晩げ、

「こさ入ったもの食ったつてええんねが、御馳走になれ」

なて、まず腹減っているもんだから、大根食つて年取りしたもんだから、食つたど。ちいと。

「恐っかねがら、あんまり取らんね」

なていだら、にこにこ、にこにこ地蔵さま笑つて、

「ええ年取りしたから、おらだ。寒くもなくてええ年取りしたから、じじとばばも飯とお酒と飲んで、着物きて、ええ年取りして呉ろ」

て、夢枕に立つたど。んだから、人さも神さまさも、情ごころざあ、掛けんなねもんだつて。どろびん。

捨

ところが親孝行な息子で、とても六十二才になったからって、山さ捨てて来らんねくて、ずいぶん考えて、考え抜いたあげくに、この家の床の下さ穴倉掘ったんだ。そしてこんどあ、そこさ御飯運んで食せて、知しやん顔したど。ところが何か、大切な木、どっちが元だか、裏だか、同じようなもので分んね。それを殿さまが大した宝物で、どっちが元なもんだか裏なもんだか当てた人に、御褒美やるって、こういうことになったって。

「あんまりどんどんという川でなく、静かに流れる川さ持つて行つて、それを流して、そうすつと元の方が重いから、自然と元から先に流れるもんだ」

て。

「先さ出たなが元、こっちが裏だから、申し出てみる」

と言わつたど。そうしたら早速、元と裏が分つたつてよ。それから、

「灰で縄をなつて来い」

と言わつて、それも大きに迷惑していたら、またじんつゝに聞いてみたら、

「縄をなつて、その縄さ火つけて、そしてそれを持つてゐるものの上き置いて、そして火をつけて焼いで、そのまま、そっくり持つて行くじど、灰でなつた縄だから」

て教えらつじや。あんまり近頃、若い者に似合せない物識りだから、どうしてこんなに物識りなもんだか、一つ聞いてみんべて、呼ばつて聞かつじやつて。したら、隠さず、

「実はこういうごんで、おれが親、とても山さ、六十二才になつたから捨てるなんていうこと、とてもおれは出来ないから、考えに考えた末、うちの下さ穴倉掘つて隠して、御飯食わせて置いたから、おれどこどういう風にでもしておくやい」

て、殿さまさ行つて言うたど。ほしたら、そんなこと、殿さまも随分考えて、みな捨てるなんていうこと、悪いことなんだから、罪など着せないから、六十二才になったがらつて、投げないで、必ずいつまでも長らえるようにて、それからそこで捨てなくなつたつて。親孝行が一生の宝だつてな。どろびん。

## 25 有馬の殿さま

有馬のお殿さまが病氣になつて、お湯さ御入湯にござつたど。そうしたげんど、どうも思わしくなくてよ、何だか危ないべて言うことで、また高札立てたど。

「殿さまのお氣に入つたことを、話であれ、むかしであれ、何手芸であれ、何でもあれ、殿さまの氣に入るようにした人さ、望み次第の御褒美出す」

て、札立てたど。ところが賢い人がいてよ、そして自分が出られねもんだから、正直な人さ教えたど。そしたら、

「有馬さま、命いのちありまの湯に出でて、病やまいは梨の花と散るらん」

梨の花の盛りであつたど。そう詠んでこいて言わつたど。その人、恥しやうし止いもんだから、咳せきしたり、咳せきばらいをしたり、そんな真似ばかりして、ほんにふるえ声で、

「ありまさま、いのちは梨の花と散るらん」

なて言うてしまつたど。そしてその人縛かからつじやて。したもんで、言うてきた人の妻が、利巧な妻で、亭主助けねでいらんねがらつてよ、こんどまた申出たど。

「こんど、女の人だ」

て言うもんで、殿さま、「寄せてみる」なて。ほしたら百姓のつまらね女いだつたど。ほして、「ほんじゃ、おれ詠んでみっから」

「有馬さま、命ありまの湯に出でて、病は梨の花と散るらん」

て言うたこんだど。したらとっても喜こばつて、ほしてはあ、その人、御褒美でつつら貰つて、亭主の罪も許すからて言わつて、大した有馬さまに氣に入つた

歌だどてはあ、じきに病氣も治ってしまったど。

## 26 猿神退治

むかしむかし、ある村に、とっても荒らさつて、唐黍とうきびだの豆だ、作物を荒らされる。それで困ってಿದ್ದって。したら、こんど、だんだんとお庄屋の家は、サンピョーシと名付った家だったど。そのサンピョーシの家のかあちゃんが、腹にイボが出たど。そんなもんで、こんどあ、イボ取りに立派に化けて、むじながよ、

「サンピョーシ、いだか」

なて言うた。そしたら、「あい」

「かか出せ、へその下の三つイボ、ぜひとも貰って行かんね」

なて言うて、困ってはあ、かあちゃん出て来ねなだど。恐っかなくて、ふるえでいっじど、こんど旦那さんが氣あきいで、お酒を御馳走したり、餅搗いて、た

まには餅食せたり色々な魚を食せたりして大事にすつど、

「今日のところは勘弁して行ぐげんども、そのイボは、誰もへその下きイボなど三つ出る人いないから、ぜひとも珍しいもんだから、おれが貰つて行かんね」  
て、しばらく経つとまた来るつてよ。腹減つた頃。ほうしてその村で作物は荒らされるという。お庄屋の家では困らせられるという。大きに困っていた。したら一人の山伏が山越えて来たげんど、どうしたわけなもんだか、足は痛むし、日は暮れるし、

「今晚は野宿だはあ」

なて、野宿した。ほしたらにわかにな、何処となしに、夜になったらにぎやかなような声した。何だべなあと思っていた。ほしたら今度はツヤツヤ、ツヤツヤと集まつて来て、足音するつて。そして丸く環作つて、

「さあ、踊るべ、踊るべ」

なて、木のタツコなど持<sup>た</sup>っている人に、むじなの腹鼓で、腹太鼓打つ。ポンポコ、ポンポコなて太鼓叩き始めた。そうすつど大将むじな、先に立って、

「みんな踊れよ」

なて、環になつて、

「サンピョーシあ、おかた、へその下の三つイボ」

なて、大将むじな言うたつて。そしてこんどあ、ちっちゃこいむじな、やつぱりそう言うて腹叩いてな、

ポンポコポンポコ ポンポンポン

サンピョーシのおかた

へその下の三つイボ

取るて言うじど 恐つかなかつて おもしや 面白い

て言うなだど。そうすつどこんど、大将むじなは、

恐つかないものには 何でもない

甲斐の国の三毛四毛

越後の国の文三猫

そればりあ 恐つかね

お生命たまらね

お生命たまらね

ああ ポンポコポンのポンポコポン

て踊っていだんだど。何回も何回も繰返して言うもんだから、その山伏、すっかり憶えてしまったごんだど。

「何かこの先に、これあ、人の名だべ、サンピヨシなて、変な名前だげんどなあ」と思っているうちに、山越えて来たら部落があつたてな。そさ来て、

「ここにサンピヨシという人いだか」

て言うたば、お庄屋だて言うたつて。

「んじや、そこさ案内してけろ」

て、案内してもらつたて。そしてそこさ行つて語つたど。

「昨夜、おれ野宿したら、こういうこと語つて、むじな踊りしつたつて。ほんで

家さそんな者来たことあつか」

「むじなや狸来たことないげんども、役人がイボとる、イボとるて来て、変なこ

とには御馳走さえしつど帰って行くごんだ。イボとんねで帰って行く。困つていたごんだし、作物荒さつて大変困る」

なて言うたら、

「何だか、甲斐の国の三毛四毛て犬だど、越後の国の文三猫って、そいつ二人は恐つかないから、生命たまねて語っていだから、そいつでも連れて来て、むじな退治したらどうだべ」

て、その山伏言うたど。それで村で相談して、ほして越後の国さ行つて文三と名付った猫、村から行つてもらつて来たごんだど。それからこんど甲斐の国の三毛四毛と名付いた犬借りて来たごんだど。そしてこんどそこもお願いして連れて来て、魚なの食わせて、そのうち穴探したんだど。どこさ巢食っているもんだべ。

「山で踊つていっこんだらば、一山越えたどこで聞いたつて、山伏言うもの」

て、山伏、先に立つて、みんなで探したら、やっぱり出たり入ったりしたようなどこあつたど。そこさ行つてみんなで掘つたど。鍬だの鎌だのぞな。そしてそこさ猫と犬置いてね、よっぽど広くして、犬と猫入つて行つたどな。代りによ。

ほうしたげんど、随分噛み合う音あするげんども、なんぼ聞かねったって、穀氣こくけを食ってねものは毛抜けるもんだどな、噛み合いすつど、むじなの毛抜けて、そして犬と猫の口が一つになって、代りに出てきて、毛ば取ってもらわんなねなど。息つかんねぐなつから。

ほして、とうとう、むじなもいっぱい居たべしするもんではあ、五分五分で、みな外さ出てきて死んでしまったけど。ほんでこんど作物も荒さんねぐなつたし、うんとええぐなつたげんども、とにかくありがたいごんだから、これを明神さまとして祀ったらええがんでな、猫塚、犬塚建てて、そしてお中にお明神さまにして祀ったのが、高畠の「犬の宮」「猫の宮」だど。どろびん。

27 弥七のはなし — 弥彦山の弥三郎婆 —

むかし、むかし、あるところに、とっても親孝行な弥七と名付ったお兄さんが  
いだったど。

年とつた母親と二人暮しで、浜端の人。ところが用達しに行つて夜遅く歸つて  
来たつてよ。弥七がよ。したらあいにく夕立が降つて来た。ほしたら、後ろ、ヒ  
チャヒチャ、ヒチャヒチャて言うから、何だと思つてふり返つてみたら、よれよ  
れの年寄りのおばんちやが棒ついで、びしょ濡れになつて来つたつてよ。

「ばば、ばば、なんでそんなに濡つてだごんだ」  
て言うたら、

「恐つかなくて、恐つかなくて、一緒に行つて呉ろ」

「あまりええ、あまりええ、一緒に歩<sup>あ</sup>ええ、ほんなに濡つていねで、おら家さ行つ  
て、当たれ」

て、連れて来て、当<sup>あ</sup>でだつて。こんど、

「泊まるんだはあ、ばば。おら家にも婆いだもの、ばばと話して泊まれはあ」  
なて言うたば、そのばば、とっても喜んで泊ったつて。ところが朝げになつて、  
「何だ、こつちの家に嫁ないなあ」

て言うたつて。

「嫁なてないべちやえ、二人扶持食<sup>か</sup>んねなだ、貧乏で」  
と。

「早くに親父に死なつて、難儀ばりしてだもんで、借金なのばかりあつて、嫁  
など来てくれる人いないなだ」

て、ばばちや言うた。したら、

「いやいや、この二十五日、嫁連<sup>つ</sup>つで来る。こんな情深い家さ来たことない。み  
な当ててもらつて、干してもらつて、泊めてもらつて、さあさ帰る。帰つて行ん  
から……」

て行つたげんど、後は何となくさびしいような、恐ろしいような感じしたど。  
弥七ばばがよ。そしてこんど、二十日になり、二十三日になり、したげんど考え

だど。

「ばば、ばば、あげなことはテンツだな」

「ほだな、一晩げばり泊って、身成<sup>なり</sup>干してもらったくらいで、あがえなお粥一膳ばり食せだどて、どっから嫁連<sup>つ</sup>で来られっこんだ、嘘、嘘」

ていだど。そして二十五日になったど。そしてはあ、

「大根ぐらい煮て待つてつか」

て、大根煮して待つてだど。浜端だから、何か魚でもちいと煮て待つてだど。

遅くまで起きっだげんど、何にも嫁なて来ないって。

「寝ろはあ、テンツだから、あいっあ、お世辞言うたのに違いないんだ」

て、寝たど。二人で。ほしたらゴロゴロ、ゴロなて、岡立ち来た。

「はあ、今夜もお雷さま、お鳴りやるな。あの婆泊めた時も濡っじやったじな」

なて語り合ったけあ、眠った。ほうしたらば、ゴロゴロ、ピカピカ、ザアザア

なて雨降って、バリツとお雷さま落ちた。自分がたの家の前さ落ちた。

「何とこりや大変なことになてしまったなあ、火事になんまいなあ」

なて。

「とにかく、寒いし、かむな、まず」

なていだげんど、気の毒で気の毒でいらんねもんだから、二人で行灯あんどんつけて出て行つて見た。そしたら、立派な簾落つでだ。ほして、

「何だべ、こんなもの、こんな立派な簾」

簾開けて、ふたぐつて見たどな。美しいムカサリ入っていたど。そして弥七、  
たまげて、

「何だ、狐の化けものだか」

なて怒つて、

「ぶっ叩いて殺してしまふ」

て言うたば、

「そがなこと言わねでおくやい」

なて、その嫁、ふるえっただけど。寒くてはあ。そして、

「当てておくやい」

て言うもんだから、

「当てらんね、狐の化けものなど…」

「狐でない、おれ、弥彦の弥三郎さまていう婆に、大阪の鴻池に嫁<sup>むか</sup>って行く嫁だった。んだげんど、弥三郎婆にさらわつて、ここさ落さつじやなだから、ここにいなければ、おれ殺されつから、何とかして、おれ、ここさ置いでおぐやい。当てておくやい」

て言うのだど。いやいや、とっても身の廻り品など、簞さみなつめて、お金もでつちり持つて来たつてよ。慈光さすような立派なもの、見たことないもんだから、婆と弥七は魂消て、話聞いたど。そして面見<sup>つち</sup>あわせて、

「二十五日なんだし、こりや、ほんじゃ弥三郎て、一体何者だ」  
て言うた。

「弥彦山の鬼の使いだ」  
てだど。

「それで、おれ、ここから出たたて、どうせ弥三郎婆さまに、ここさ寄こさつた

んだから、どうか置いておくやい」

「そんな着物きて、おらえに置かんね」

て言うたらば、

「何でもええから、婆ちちの衣裳でも何でも着るから、おれに着物貸しておくやい」

て、着物きて、

「よそさ行つても、嫁だもの、どこの嫁になつても同じごんだから、米とがせておくやい、座敷掃かせておくやい」

て、とてもまめまめしく稼いで、そのうち、イワシ取れだんだど。浜なもんだから。したら弥七考えたど。

「なあ、ほんに金さえあつたら、たくさんとれたイワシ買つて置いて、そしてまた明日にとれないじど、そんな時高く売られつど借金も<sup>な</sup>済されるし、いまちいと楽な暮しされるんだげんどもなあ。こんじやお粥食つて生きてるばっかしだず」

て喋つたの嫁聞いてで、

「お金だら、おれ持ってだから、ええほど買え、こいつみなお金だから」  
て、その嫁。銭いっぱいもってだ。それでイワシたくさん買い求めて、そのうちシケ来たりして取れないこともあつて、とつてももうかつたつてよ。そしてその嫁さん来てから、金持になつて、とつても睦まじく暮していだつたど。そんなちっちゃこい親切が大きい幸せになつたど。どろびん。

## 28 糠 福 米 福

むかしあるところに、糠福という子ども一人持つて、かあちゃん逝ぐなつたんだど。それで後からおつか貰つたらば、こんどは米福という子ども生まつたど。同じ女の子でな。ところがこの糠福はとつても気持もやさしいし、顔も美しい子どもだつたて。それにひきかえて、米福はあんまり美しくない娘だつたど。んで見てつど、かあちゃんがみつじど、糠福が憎くて、とても憎んでいだんだど。何

とかしてこの糠福さえもいなければ、米福にこの家の後継ぎさせられるなあと  
思つて、意地悪れごどばかり語つていたど。そのおつかさがよ。そして何でも  
米とぎでも、掃き掃除でも拭き掃除でも、仕事でも、みんな「姉さんだから」て、  
糠福にばかりさせて、米福は自分とかまわず安泰にさせてだ。

今日も今日で、お祭りだ。大したにぎやかなお祭りだから、

「おれと米福でお祭りさ行つて来つから、この稲こいで、スルス挽いで、食れる  
ばかりにして来られれば来ればええし、来らんねとき、来らんねごで」

て、行つたど。ほうしたら「ほうか」て言うたげんど、こんど裏の山さちよつ  
と行つてはあ、泣いっだずも。そしたら弁当もらつて弁当置いで行つたんだから  
て食うべと思つたら、大根ばかりで、米など入つていねつて。

「こんなもの食つて、そうして稼がんねこんだもなあ」

なていたら、そいつを水溜りさバアツと投げだつてよ。その御飯、大根ばつ  
かりで、嫌んだくて。したら、水が青くなつたり、赤くなつたりしたつて。そし  
て今度、何か出て来たど。「恐つかねえ」て逃げだら、

「恐つかなくない。糠福、おれ、とつくに死んだおっかだぞ」

て、出てきたつて。

「決して、つらいと思わねで、おつかの言うこと聞いてなあ、そして米福と仲よくしてろよ」

て教えだつて。

「御褒美くれつから、これ、打出の小槌で言うもんだから」  
て。

「打出の小槌、何でも欲しいもの、何々出ろよて欲しいものの名前言うて叩くじど、出るから」

て教えらつじやど。そうすつど、うれしくてはあ、そいつ持<sup>た</sup>つて、テンテンと来たど。やさしくさえもしてつど、出んなだから、ええあんばいだと思つて、こんど稲こいで、スルス挽くべと思つていたら、友だち、

「糠福、お祭りさ歩<sup>あ</sup>えべ、お前のおつかと米福など朝げから行つてだどら」

「おら、行かんねもの、これからこのスルス挽いて、米搗いで行かんねもの」

「ほんじゃら、おらだ手伝うから」

「ほだか、ほんじゃ、おれ駄賃出すから、手伝つてな」  
なて、手伝つてもらった。

「お前、何ええ」

て言うど、

「おらよ、衣裳持ったげんど帯もつていねなよ」

「ほんじゃ、帯が。お前は」

「おら、下駄持たねもの、あつけんども、ええ下駄ないなよ」  
なて。

「お前は…」

て言うたば、

「着物ないもの」

「んだか」なて、して、「着物出ろ、下駄出ろ、帯出ろ」なて、打出の小槌叩いたど。そしたらみな出て、

「ほら、こいつ下駄、お前は着物、お前は帯」

「んじゃ、ええがった、ええがった。おしようし」

なて、手伝つて、こんどはあ、駄賃もらつたもんで、喜んで家さ行つて仕度して来た。その間に、こんどは糠福、

「おれのも、ええ衣裳出ろ」

て叩いだら、そんなにええでもない、悪いでもない、ちようどええ着物出だつて。こんどそいつ着て、お祭りさ行つたつて。

ほうしたら、大したにぎやかなもんで、そこさ殿さまも忍びで、出たつて。若殿さまも。ほんじえ、こんどあ米福、

「あららら、おっか、姉ちゃ来つたぜ」  
て言うた。

「姉ちゃなど、なんで来つこんだ。今頃スルス挽きやつと掛つたべ。来ねごで。おらだうまいものいっぱい食つて行くべ」

「姉ちゃにも食せんねごで」

て言うたば、「ええから、ええから」

おつか言うてだど。

「同じだぜえ」て言うたば、

「大体、衣裳もつてないもの。ほがな来られんめえちやえ」

「んだて、友だちといたぜ」

「いや、来ねなだ、米搗きしった、今頃」

なて、そしてお祭りさ行つて、ちいと早く来てはあ、知しやんぷりしていたば、それから四五日経った。

箆持<sup>たが</sup>つて迎えに来た人ある。

「糠福ざあ、ここだか」

「ほだ、何したごんだ、おらえの糠福」

おつか出て行つたど。したれば、

「何もしいげんど、こういうどこではあ、糠福という娘見て、大変にええから、お嫁にもらいたいて言わっじえ、迎えに来たから」

「ああ、ええどこでない、ほがえな呉れる、呉れる、すぐ持つて行つて呉ろ」

なて言うた。米福そこ見つた。お籠なて見たことないもんだから、籠にのせらつで連れて行がつたのを見て、くやしくて、くやしくて、

「おらも、おつか、姉ちやのように籠さのつだい」

て、毎日言う。

「んじや、仕方ないから」

て、こんど、おつか、箱さつけて引いで歩つたど。池のぐるりを率いたり、道をひいたりして歩つた。<sup>ある</sup>

「姉ちやのつたのど、ちがう」

て言うげんど、わが子可愛いもんだから、なるだけ似たようにして、拵えて率いて歩つた。ところがどうしたはずみなもんだか、むぐつてしまつたど。途中でその籠が川さむぐつじや。ほしてはあ、「早く早く」なて言うげんども、女の足で追っかけて、なていううちにはあ、籠さなの乗つたもんではあ、板<sup>いた</sup>パンコさのつたもんだから、がらくたで上がらんねくて、米福死んでしまつたてよ。

ほだから意地の悪いことさんねもんだ。立派にして働いっただ人あ、殿さまのお嫁になって、めんごい、めんごいなて育てた子ども、川さ入って死んでしまった。どろびん。

## 29 和尚と小僧

むかし、お寺によ、小僧二人と和尚さまと、わずかに離れたどこさ、おばさまもいだつてよ。

ほうすっど何で物をそのおばさまさばっかりやって、小僧の待遇が大してええくないがったど。と、小僧は、常がね（いつも）二人の小僧が面白おもしろくないて言うたつて。と、何かの拍子に和尚さんが、

「そんな、何も落つでだもの拾わんともええごで」  
て、座敷掃きだか何かのときに言うたつて。ほしたら一人の小僧つれて和尚さ

まが米沢さ行つて来たつて。ほして、

「やれやれ」なて入つてきて、「小僧!」「はい」「煙草入れ見つけねがつたが」「あ  
あ、門先さ落つでだっけ」

て言うたど。

「何だ小僧、他人ひとがこの煙草入れ落して来た時、拾わねで落つでだけで…」

「おれ、股いで来た」

て言うたど。

「股いで来たごんだら、拾つたらええがつたごで」

て言うたつてよ。そしたら、

「和尚さま、先度な落つでだもの拾うなて座敷で言いやったべ。んだからおれ拾  
わねで、またいで来た」

て言うたつて。

「拾つて来い」「はい」「これからそういうことしないで、落つでだものだつて拾  
わなねどき拾わんなねごで」

て言うたど。

こんど、いま一人の小僧つれて、何か用達しに出かけた。そしたら船坂のあたりまで行ったら馬車馬いっぱいそろって行くどこだけど。そしたらその馬、糞えんこやっどこだけど。そうすつど和尚さまの笠、

「和尚さま」

笠をひよいと取つて、馬の尻さちちゃんと出したずも。そうすつど馬、そんな遠慮ないから、かまわずやつたずも。

「小僧!」「はい」「何をする、笠、そんな台なしなことさんないごで」

「台あるつし、和尚さま、先度な落ちてるものは、拾つたてええざあ、今落ちるどこだから、汚れでいなしと思つて、笠で受けた」

自分の笠、突出っださねで和尚さまの笠さ馬の糞つめてしまったど。そしてまず、そこでおんつあつたど。

こんど、また二人で語つていんな、

「何でもうまいものでも何でも、おばさどさ持って行け、持って行けって、おらだどさ、ほとんど食<sup>か</sup>せねがら」

そのうち、

「小僧！」「はい」「あの、法事の饅頭、おばさどさ持って行け」  
持<sup>た</sup>って行<sup>が</sup>ったずも。

「おばさ」「はい」「和尚さま、饅頭よこした」「ああ、ほうか」

「和尚さま来てもええなだげんども、何だか、あの叔母、くさくて、叔母どさ行ぐど胸悪くなつから、とてもくさくて行がんねから、われ持って行け、なて言うもんで、おれ持って来た」

「ああ、そうか、どこくさいべな」

なて、大した気にもないで、叔母さ居だつけ。

「ただいま」

て言うけあ、

「喜んでだけが」

「とっても喜んでいだっけな」

食せらんねから、ごしやげでなんね。ほしたれば、

「和尚さま」「何だ」「おばさ、こげなこと言うてだけな」「何て言うてだけ」「喜んではいたけどもよ、和尚さま、鼻大きくて、何なもんなんだか、高いんだか、大きくて、鼻見つどもらった鰻頭もうまくないようだっていだっけな」

こう言うたてよ。

「鼻、そんなに大きいか、おれの鼻、おらだ見つど当り前のようだけでも、おばさ見つどそうだど」

こんど気になって気になって、和尚さま仕様ないもんだから、おばさどさ行つてみんなと思つて行つたげんど、戸の口どこで考えたど。昔は和尚と叔母なんて一緒に住まんねもんだつたからな。「おば、おば」て行んかと思つたげんども、「鼻大きいなて言うたなて」て、一生懸命でおつつめて見たげんど、やっぱり元からある鼻だから、なりっこないってなあ。

「見たぐないて言うのでは、つかんだ方がええ」

て、鼻つまんで、「おば、おば」で行ったじも。そしたらおば、誰来たと思って出きたば、和尚さま鼻ぎつちり押えつたじも。

「この和尚、あんまりなことを言う。くさいから、あのようなくさいおば無いつて言うたじ、おれさなの、喰付くことないから、決してこれからおれどさ来んな。饅頭などいらねから、そっけなものいらね。米もいらねし、砂糖もいらねし、何にもいらねから来んな」

和尚さま、シオシオて、また面めんくさい（恰好わるい）がど思つて、鼻びぎつちり押えて歸つて来たど。ほうすつど小僧二人は、

「うまく行つたなあ」

と思つて喜んでいた。そしてはあ、こんどしばらく、おばさも来ないし、和尚さまも行かねもんだから、何かえ少しずつ貰つて食れるようになった。んだげんど夜になつじど和尚さま、酒お爛して、

「ああ、ええ爛だ、ええ爛だ」

て、酒飲むなだと。ほだげんど小僧にむろん飲ませねんだしな、「先さ寝ろ」て

言わつで寝ていっど、こんどさんざら酒飲んで、餅。パタパタ、パタパタで、当て木さ叩いて、プウプウて吹くなだど。そうすつど二人で相談して、

「おまえ、おらだ名前、小僧小僧てばり言わつでいらんね。よつぽと大きくなつたもな。名前もらつたらええがんば」

「和尚さま、おらだに名前つけておくやい。小僧小僧で、どっち言わつたか分んね。どっちも小僧で」

「はあ、何名付つだいもんだ」

「おれは、エーカンと名付つだい」

て言うたずもな。

「まだ、ひどいつまらね名前なもんだ、エーカンなて名付つだいのか」

「こんど、エーカンて呼んでおくやい」

「じゃ、和尚さま、おれどこあ、プウプウ、パタパタと名付て…」

「何だ、そんなめんどうな、パタパタなてが」

「んだ、そいつ、おれ一番氣に入ってたもんだから、そうしておくやい。エーカ

ンのこと聞いて、おれの言うこと聞かねでいらんねから、そうしておくやい」

「はあ」

和尚さま、言うたずも。

また「小僧寝ろよ」、名前などコロツと忘せではあ、「はい」て寝たずも。また夜になったもんだから、和尚さま始めではあ、

「ああ、ええ爛だ、ええ爛だ」

て、飲み始めた。和尚さま気あつかねで、言うた。「はいはい」、梯子返事して出てきたど。

「なんで、出てきてんなだべ」

て、いるうちに、餅ふぐつできたもんだから、餅上げて、「ふうふう、パタパタ」て、当て木き叩いたど。「ハアイ」なてもう一人の小僧出てきた。

「何だ、寝ろと言うたに、寝もしないで、皆ハイなて、つまらねごと語って呼びもしないな、ハイなて何だ、小僧」

「おら、小僧でないっし、今日から」

「何だごんだ」

「おら、エーカンと名付ったな、エーカンだ、エーカンだて言いやつから、梯子返事して起きて来たんだ」

言うたら、いま一人な、少し間置いて、

「ブウブウ、パタパタと言うから、おれ起きて来たんだ」

と、一人で食わんねくてはあ、三人で分けて食ったって。

したら、こんど酒飲んで餅食って、ただもの食うべと思つて、大きな梨ゴロンと一つ和尚さまが脇さ置いっただ。和尚さま、

「丸負けしてらんね、おれも忘せで名前呉つて、忘せたどこは悪いげんど、こんどこの餅も分けたし、酒は分けねげんど、この梨で仇かたきとつてくれんべ」

と思つて、

「われだ二人で、後先き梨つけて歌一つ詠んでみろ、そうすっじど氣に入つたように詠めば、梨食かせるし、ほんでないときは、見た前で、おればり食うから」  
こういう風に和尚さま言うたつて。ところが二人考えただけざあ、

「んじゃ、二人で一つだごではあ、ええ、二人で一つだつてええごで」

て、和尚さま言うたど。それからエーカンの方、

〈梨一つ、にくき和尚の生首を〉

て出したごんだど。したら、プウプウ、パタパタの方で、

〈とりたくもあるし、とりたくもなし〉

て言うたんだど。そして三人で分けて食ったど。

ほうして和尚さま、つくづく考えた。笠も一台わかんなくさつじやし、おれ悪れなだから、まず、こんどはみんな仲よくして、みんなではあ、分けて食うべはあ、これから睦まじくして、ええ師匠と弟子になるべなあて、和尚さまの方で折れではあ、うんと仲よく暮して、身に勝った小僧だて、うんと小僧誉めたど。

30 一言千両

ある農家の親父が、出稼ぎに行つたてよ。金に困つて出稼ぎに行つた。正直で名とつた人が、出稼ぎに行つて三年も働いた。そしてそのお金持<sup>たが</sup>つて、ぜひとも返さんなねからと思つて帰つてくる途中でよ、髭<sup>お</sup>ぼうぼうと白髭生やした仙人みたいな人出て来て、

「道中が長いから、おれの言葉通りにしろ」

て言うもんだから、「はい」て、正直なもんだから言つたら、

「大木の下より小木の下」

て言うたてよ。

「これは千両の言葉だぞ」

てよ。それからこんどは、

「なる堪忍は誰もなる、ならぬ堪忍、するが堪忍」

て言うたつて。ほして銭、手ぶらに、老人に取らつてしまった。ほしてはあ、

つまんねくてはあ、夜通しかけて食うものも食わないで、家さ帰るべと思つて来たら、途中で雷鳴つたつて。そうすつど大きな杉の木あつたから、濡れたくないから、あそこさ休むかなあと思つたげんど、そんな時思い出して、「大木の下より小木の下」て言わつじやもの、この藪さ入つて雨宿りしんべと思つて、藪さ入つたら、ところが大きい木さ雷が落つて、その木がさけだつて。

「ああ、ほんに、あれは神さまだつた。おれああの木の下さ休めば死んでしまうなだつた。ええがつた」

と思つて帰つてきた。家さ来たて言うがと思つたら、家の中でゴモゴモ、ゴモゴモて語つてゐる音する。

「はて、誰来つたべなあ」

と思つたら、かがが、

「何もないげんども、一つまず、一膳上がつておくやい」

なて言う。と、悪い心持ち出して、

「おれの留守に、如何なごんだて男寄せていたに違いない、おら家のおつか」

なて、ガリリ開けて殴つて呉れっかなあと思つたげんど、

「いやいや、じんつあに教えらつて来た。なる堪忍が誰もなる、ならぬ堪忍、するは堪忍で教えらつじやもの」

と思つて、「今来た」て言うたつて。

「あらら、親父来たか、ええがったまず」

て入つて来てみたらば、ドデラ着せた木の根っこ炉端さ置ிட்டの、そんなことういうことで、年寄りの白髭の人出てきて、おれの錢べろつと取つたごんだ。ほんではあ、三千両の言葉教えらつて、三つの言葉買つて、一文も持<sup>た</sup>かねで来たから勘弁して呉ろて言うたら、

「そのことなの、さつぱり差し支えないから、その三千両の言葉ありがたかつた」て言うたど。

「何年待ちでも来なくなんな、その言葉聞いたばかりで、藪さ雨宿りしたこと生きて帰つて来らつじやなだから、その人は神さまだから、何にもお金とらつだなんて、くやしいと思うことないから、ほんじゃ休んで、なんぼか疲れたべか

ら、休むべ」

なて、休んだって。て、次の朝起きてみたら、恵比須・大黒さまのどこに何かお財布みたいなものがっていた。そして見たら、自分が三年稼いだお金がちやんと恵比須さまさ上がつていだって。ほんで二人、うんと喜んだなていう話だった。どろびん。

### 31 福の神と貧乏の神

ある村で、とっても心の立派な正直な人だったてよ。ほしたらお年取りの晩によ、いや、ひどくやつれた道心が鉦叩かねいて来たつてよ。して、一夜の宿貸して呉ろて来たげんど、お年取りなもんだから、隣から隣まで、みんな邪険にして、「まず、今日、年取りだから」

て、ことわらつじやて。したら、その正直な家で、

「ああ、泊らっしゃい、泊らっしゃい」

て上げだつて。家の人もお湯さも、みななど入んねうち、その道心坊お湯さ入  
れで、魚、家の人も同じに合せて、酒のませで、そうして夜っぴいて夜話して寝  
たど。

そしたら次の朝げ、御飯だから行つてみたつて。そしたら、その音しない。

「つまんねなあ」

なて見つだつて。布団ひつたぐつて見たら、布団の中から慈光さした。何だべ  
と思つたら大判・小判、布団の上さたくさん、布団の中さ並べて、布団かけで、  
開けてみたら、慈光さして、いないつてよ。ほしてその家、貧乏だったげんど  
も、にわかになした金持になつてはあ、いなくなつたから、堅くその金、しまつ  
ていたんだど、んだげんど段々に使つて、それが村の噂になつたつてよ。それで  
こんど村の狡猾な男あ、

「おれあ一つ泊めてみんべ」

どて、夜、よっぴいて起きつたら、やっぱり道心坊、鉦叩いて来たつてよ。ほ

したら、「泊めてくろ」なても言わねな、むりむり泊めだもんだど。

「それ、おら家さ泊まれ、おら家さ泊まれ」

て、ほしてお湯さ入つて、あの家で御馳走したより、より以上御馳走すつと思つて、すこだま御馳走したど。ほしてはあ、寝たど。次の朝げ早く、金見つだいばかりで暗いうちに起きて行つたて。ほうしたら道心坊、腹痛みしつたんだど。ほうしてはあ、食べすぎて医者あげんなねごと出来てしまった。

「葉呉ろ」

なて、おまけに言わつじやど。親父怒つて、

「金神と思つて泊めたら、貧乏神」

て言うて、早く行けて言うて追つたてでやつてしまつたてよ。んだから人の真似して正直に神宿るで、狡猾なくせに人の真似するもんでないど。そんで今でも大年取りは夜遅くとして、遅くまで起きてる。子持ちは早く年取るといふことになつていんど。

32 四百ぶらりん

嫁と姑て仲悪いもんでよ。

ある家の嫁と姑すぐく仲悪るがった。ところが和尚さまが持齋に来たつて。そうして風鈴振ったもんだ。何かして、

「あの、和尚さま、風鈴持<sup>た</sup>つて来たぜなあ」  
なて言うた。

「あいつあ風鈴でない、法鈴だごで」  
て、また始まったんだごで。ほしたら、

「何語つてる嫁の分際で、風鈴だず、あいつ」  
「なんぼ、おつかだつて、法鈴だ、あいつ」

まずはあ、ヤンヤンとやって、風鈴だ法鈴だて言うてラチがあかねもんだから、稼がねで喧嘩してらんねもんだから、嫁さんが稼ぎに出かけた。

ところがくやくして、負けず嫌いで負けていらんねからつて言うもんで、和尚

さまさ来て、

「あいつ何だべ」

て言うたら、「んだなあ」て、和尚さまも言わねがったど。喧嘩して来たって言うもんだからよ。ほしたら錢二百呉つじやごんだど。

「こいつで、どうかおらえのおつかどこさ、法鈴だつて言うて呉ろ」  
「そうか」

て、和尚さま言うた。

こんど、嫁、稼ぎに出た頃だから、おれあ和尚さまさ行つてみんなと思つて、おつか、早速和尚さまさ来て、

「あの、今朝持つてござったの、風鈴だどらな」

「おれ持つて行つたな、なあ」

こつちから錢とつてた勘定あるもんだから、なかなか言いづらいべも…。

「んだなあ」なて言うたら、

「そうも言うごでなあ」

なて、煮立たねふりしてだ。

「おれ、嫁と喧嘩して、大喧嘩まぐつて、おら家の嫁は馬鹿できずがつて、法鈴だどて聞かねから、おれ、風鈴で言うに聞かねもんで、喧嘩やつて来た。ほんじゃ風鈴にしておくやい」

て、二百、また呉れだつて。

「こいつ少しばりだげんど、お茶でも買って飲んでおくやい」

て、いらなからて言うに呉れて、また夜家さ引つこんで来たら、喧嘩の盛り返してきた。やんや、やんや、風鈴だ、法鈴だて、同じこと喧嘩した。

「ほんじゃ、聞きに行つたらええごで」

て、二人自信あるわけだじだな。ほしてこんどどっちも氣強くて、和尚さま考えだ結果よ、

「あれはなあ、むずかしい言葉で言えば、風鈴でもなくて、法鈴でもなくて、四百ぶらりんだ」

て言うたど。どろびん。

## 遠藤たけのさんを尋ねて

— あとがきに代えて —

遠藤たけのさんを訪れたのは昨年の夏八月である。米沢東高の民話班をつれて米沢市関に一泊して、部落内の古老をたずねて昔話を聞いたが、遠藤さんの家は部落の一番はずれだったので、私一人で、とぼとぼ三十分も歩いて行つた。遠藤さんの家は戦前に越後ゴゼや祭文語り、説教語りなど、部落をおとずれる芸人をいつも泊めていて、越後のおマツゴゼ、おハナゴゼの宿でもあつたというし、ゴゼに集まる金が足りないときなど、箆を廻して金を集めてくれたことなどをなつかしそうに語ってくれた。たけのさんに昔話を語ってくれたのは、祖母で九十四才まで生きた人だったという。ちょこんと祖母のふところに入って何回も同じ話をねだつたという。祖母という方は東置賜郡川西町中郡の堀金出身であり、姉家督でたけのさんが家を継いでいる。

この地域では、相槌に「ハート」と必ず入れなければならないと言い、結句は

米沢市と同様「どろびん」とか「どろびんさん助、さんすけが頭さ火あついて、……ちゃんかかって、やつと消した」などがある。とつぜんお邪魔して三十数話をお聞きすることができたのだから、もっと知っていることは当然だが、今後の課題として、ひとまず一回分の昔話をここに収めた。

クラブ活動の指導ということで生徒の収集のモデルのつもりで、私だけが聞いた分をガリ版にしたが、生徒の分は苦勞して、原稿を整理しており、それらの昔話と総合してみると、米沢市関部落の昔話の大凡が分かってくるものと考ええる。そんな意味でも、生徒の整理のモデルになればと考えるものである。

関部落の調査については関公民館長の宍戸氏をはじめ、関小学校長中山芳先生や、部落の方々にお世話になった。一年にもなろうとしているのに、ようやく小冊子にしたものであるが、それはあまりにも一部分でしかなく、しかもあまりに時間がかかりすぎた点は、お詫びしなければならぬと思っている。しかし大変にすばらしい話者である遠藤たけのさんにお会い出来たことは、私だけでなく、クラブの生徒への無言のはげましと感謝し、小冊子にまとめたのを機会に再度遠

藤さんの語りを聞きに参上したいと思っている。限りない感謝をこめて…。

昭和四十八年六月

武田 正

四百ぶらりん

— 遠藤たけの昔話集 —

昭和四十八年六月二十日 発行

編者 武田 正

住所 山形県南陽市三間通二二二の三

話者 遠藤 たけの (明治 35・12・7 生まれ)

住所 米沢市大白布

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

四百ぶらりん 遠藤たけの昔話集

\*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十六年八月一日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）  
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）  
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）  
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）  
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）  
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）  
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）  
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）  
『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）  
『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）  
『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌオさんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）  
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）  
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』  
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『蛤姫(上)(下) 佐藤家の昔話(八)』(一九七五年四月発行、二〇一一年七月再刊)

『おとぎり草 佐藤家の昔話(九)』(一九七五年七月発行、二〇一一年七月再刊)

『ゆき女 佐藤家の昔話(十)』(一九七六年二月発行、二〇一一年七月再刊)

『ねずみの角力とり 佐藤家の昔話(十一)』(一九七六年七月発行、二〇一一年十二月再刊)

『かみなが姫 佐藤家の昔話(十二)』(一九七六年十一月発行、二〇一一年十二月再刊)

『山鳥むかし 佐藤家の昔話(十三)』(一九七七年九月発行、二〇一一年十二月再刊)

『和尚と天狗 佐藤家の昔話(十四)』(一九七八年八月発行、二〇一一年十二月再刊)

『竜宮童子 佐藤家の昔話（十五）』（一九八〇年一月発行、二〇一一年十二月再刊）  
『とーびんと 工藤六兵衛翁昔話（二）』（一九六七年七月発行、二〇一二年七月再刊）  
『とーびんと 工藤六兵衛翁昔話（二）』（一九六七年八月発行、二〇一二年七月再刊）  
『とーびんと 工藤六兵衛翁昔話（三）』（一九六七年十月発行、二〇一二年七月再刊）  
『とーびんと 工藤六兵衛翁昔話（四）』（一九六七年十二月発行、二〇一二年七月再刊）  
『四百ぶらりん ― 遠藤たけの昔話集 ―』（一九七三年六月発行、二〇一四年八月再刊）